
Red Eyes

上月海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e d E y e s

【Nコード】

N 2 0 7 2 K

【作者名】

上月海斗

【あらすじ】

自分を殺したカオスアイテムを封印するために為に師匠と旅をする不死の少年、ルイ・ヒルダス。
ある日、偶然にもそのアイテムに関連する物の情報を入手する事となる。次第につながっていく過去。

……ルイはアイテムを封印できるのか？

現在執筆中の虚無の王の設定の元になった話です。一応中編（薄いライトノベルぐらいのページ数です）

完結しました。

プロローグ（前書き）

数年前、PCが壊れた時に消えたと思われていた話が出てきたのでアップしました。

この話は当時、このサイトで成瀬浩雪という名前で書いていたものです。実は完成していたのですが、アップして一週間でPCが壊れるというアクシデントに見舞われ、お蔵入りとなっていました。

今読むと、テンションとノリで書きあげています。そして、酷い文章能力です（今もたいして変わりませんが）

ちなみにこのお話、現在執筆中の『虚無の王』の設定でちょいちょい使われている部分があります。

なので設定がちょっと似ている所もあります。

ですが、設定は似ている部分があっても、まったく別の話になっていますので、ご安心ください（楽しめるかどうかは別として）

それでは、本編をお楽しみください。

プロローグ

「……待ちなさい」

自分の足元で倒れ伏している女が口を開いた。
酷い出血。おそらく、もう助からないだろう。と言ってもその傷をつけたのは俺だ。

「なぜ……こんな事をする」

殺気の籠った目、間違いなく自分を殺す気だろう。だが別にかまわない。

殺される前に殺せばいい。昔からずっとしてきた事だ。

「生憎、俺は縛られるのが嫌いだね。俺は、転生しレグナの眼を手に入れ、レグナを復活させる。そしてレグナと同化し世界を手に入れてやる」

そついい残し、ゆつくりと剣を構える。

「ならば、私も転生しよう。レンはもう逝ってしまったが今ならまだ転生の儀が間に合う。そして、お前の意思を打ち砕くさ」

俺の足を女が掴む。緩慢な動き。

「ほざけ」

その言葉と俺の腕が下りるのはほぼ同時だった。
女の胸に深々と刺さった剣。

——ラルヴァの剣。

凄まじく長い片刃の長剣。そして、その刀身は怪しく光っていた。

「俺の野望を邪魔するなら、何度でも殺してやるさ」

きつと俺の言葉は彼女には届いていない。

「このラルヴァの剣でな」

俺は剣を引き抜き静かに自分の胸に突き刺した。

次第に、目の前を暗澹が支配していく。

「くっ！俺は、これで強くなる。転生は……成功する」

徐々に遠のく意識。そして、視界は完全に閉ざされた。

第一話 不死の少年

「金色の光に包まれし騎士よ……」

少年は、ゆつくりとカオスソードを口にする。

人が魔法を使う時には、ほとんどが精霊の力を借りる。

魔法とは使用者が頭の中で組み立てた魔法のイメージを精霊がくみ取り、使用者の魔力と精霊の力によって具現化される物である。

そして、そのイメージを精霊に分かりやすく伝え、語りかけている言葉をカオスソードと呼ぶのだ。

つまり、少年は魔法を発動させている最中である。

張り詰めた空気。少なくとも少年の周りはそう感じる事ができた。

「……そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！」

詠唱が終わった瞬間、甲高い音をたてて、真っ白な閃光が火柱をあげる。炎は土煙を巻上げ、標的となったモンスターを包み独特の舞を踊り消えた。

後には宝石しか残っていない。モンスターが死んだ証拠である。

硝煙が辺りを包む。固く、固められた地面。囲むように覆う岩壁。

逃げ道は何処にも無い。ここは闘技場なのだ。

刹那、闘技場に歓声が上る。

ここ、クルツ大陸のほぼ中央に位置する貿易都市、ゲートは異様な熱気に包まれていた。

「勝者！ ルイ・ヒルダス」

ルイと呼ばれた少年は片手を上げその歓声に応えた。

彼の名前はルイ・ヒルダス。
年齢は十八歳。

小さめの身長と少し童顔とも言えるその顔は、まだ青年と言っ言葉は少しに合わない感じがする。

肩ぐらいまである金色の髪。その髪は、後ろで一本に結われさっぱりとしている。

服装は動きやすさを求めているのだろう、革で作られたジャケットとズボン。その衣服は黒で統一されていた。

そして、それよりも印象的な物。それは彼の眼だ。

左眼は、澄んだ空の様に青い碧眼。だが、右眼は燃える様な真紅の瞳をしていた。

「楽勝！」

強気な言葉と、自身に満ちた顔。今の彼はまさに敵無しといった感じである。

「さあ、次の対戦相手は……いいのか？ これ？」

マイクパフォーマンスをしている闘技場の司会者、マーク・クレハは、少し戸惑っている。

「何言ってるのさ。さっさと次の相手を出しちゃってよ」

この闘技場ではすでに常連となっているルイにとっては、ここのモンスターとの対決は遊び場、兼、修行場と化していた。

「まあ、彼の強さなら問題は無いだろう。次の相手は――」

重々しい扉がゆっくりと開かれる。

うつすらと輪郭が見える。かなり大きい。

そして完全に姿が移し出された瞬間、ルイは身震いをした。

体長は二メートル弱。三つに枝分かれた首。歯は鋭利な乱杭歯で、噛まれたらただでは済まないだろう。

「なっ！ 何でこんなのがここに！」

明らかに取り乱すルイ。

「次の相手は、地獄の門番で有名なケルベロスだあ！」

そして、マークの声と歓声。だが次の瞬間。

「ウグウウウウ」

低い唸り声が歓声をかき消した。

「死なないでくれよ、ルイ！ 健闘を祈る！ ってか」

そう言ってマークはマイクパフォーマンスを終える。

「まったく！ 勝手な事を言っちゃって」

だが、相手がここにいる以上戦わなくてはいけない。それが闘技場のルールなのだ。

湧き上がる歓声と、唸るケルベロス。

「まあ、死ぬことはない……か」

そう呟くルイ。ゆっくりと剣を鞘から抜く。

抜き放った長剣が、太陽の光を照り返した。

「だけど痛いのは嫌だ。本気で行かせてもらっよう」

剣を持つ右手を引き、左手を前に突き出す。独特の構えをするルイ。

そして、

「絶大なる炎よ。紅き帝王よ！ 我と共に敵を討て！ 炎よ！ 我と一つになれ」

詠唱が終わりを告げた瞬間、驚くべき事に炎が剣に纏わりついた。魔法剣。ルイがもつとも得意としている技の一つだ。これは『魔法』と『剣技』を合わせた技で基本的には賢者しかできないと言われている技だ。

魔法使いの性質は基本的には大きく光と闇で分かれている。例えば、さつきルイが使った攻撃系の魔法は、闇属性に位置する。それと対称的に回復系を特徴とするのが光属性の魔法である。

人は生まれた時から、光と闇、どちらかの属性を持っており、使える魔法は属性によって決まる。術者が光属性の者は光属性の魔法しか使うことは出来ない。例え、対称の属性の魔法を鍛えたとしても使えるようになることはまず無い。それは闇属性の者にも同じ事が言える。

だが、ごく稀な例で、両方の属性を持ち合わせている者が居る。ルイの場合だ。二つの属性を持つ者。それが『賢者』となるのだ。賢者は、昔から『万能の聖者』と呼ばれ崇められて来た。今も、その名残が強く残っていて、神の使いと言う説もあるぐらいだ。それぐらい貴重な存在なのだ。

「行くよ！」

柄を強く握り締め、ルイは地面を蹴った。
だが、

「グウウウウ」

低い唸り声が闘技場に響く。そして、その直後。三つの首は深く息を吸い込んだ。間違いなくこれから何かをするモーションだ。

「まずい！」

滑り込むようにその場に伏せるルイ。その瞬間、ルイの上を火柱が通りすぎた。

「怖っ！」

急いで体勢を立て直し距離を取る。

「——くそっ！」

毒づきながらの詠唱。

「絶大なる炎よ。赤き帝王よ。その姿を爆炎に変え、我に力を与えよ！」

刹那、火柱がケルベロスに向けて放たれた。だが、ケルベロスは三つの口から炎を吐き出しそれを相殺させた。熱風が辺りを占める。

「マジかよっ！」

今までのモンスターとは桁外れの強さ。久しぶりに感じる焦燥感が少しでも気持ちよかった。

「次は、決めるよ！」

再び、柄を強く握り地面を蹴った。

その結果、ケルベロスとの距離は一瞬で縮まり射程距離内に捕らえる事に成功した。

「うおおおお！」

凄まじい咆哮と共に剣を振り下ろす。

閃光一線。ルイが剣を振り下ろすとほぼ同時にケルベロスの首が一つ落ちた。

そして、その切り口と頭は燃え上がり炭化する。剣に纏っていた炎がケルベロスの首を焼いたのだ。

「やったね！」

自分の勝ちを確信するルイ。

だが、ケルベロスの眼はまだ死んでいなかった。

「グウウウウ！」

けたたましい咆哮。

刹那、ケルベロスは、首を突き上げたのだ。内臓を抉るような一撃がルイを捕らえる。

「うぐっ！」

強力な一撃。更にケルベロスはその瞬間を逃さなかった。
衝撃で浮き上がったルイの体に再び首で攻撃したのだ。今度は叩きつけるように。

「ぐがつ！」

強烈に地面に叩きつけられるルイの体。大きく跳ね、そして転がる。

「……ううあ」

かろうじて意識は保っているようだ。だが、苦しそうに呻きながら立ち上がろうとしない。いや、正確には立ち上がる事が出来ないのだろう。

そして、ゆっくりと歩み寄るケルベロス。

まるで、獲物をしとめたかのようにゆっくりと……

「くそっ……なんて奴だ」

剣を杖のようにして立ち上がるルイ。酷く背中が痛むのか足に殆ど力が入ってない。気を抜いてしまえば崩れ落ちてしまうだろう。

だがそんな時でも、戦いは戦いだ。

じりじりと歩み寄るケルベロス。そしてケルベロスはルイの右の首筋に噛み付いたのだった。

「ぎゃあああああ！」

吹き出る血飛沫。ルイの首から大量の血が流れ出る。

「おい！ 係員！ 早くケルベロスとルイを引き離せ！」

その状況で一番早く動いたのはマークだった。だが……

「なーんちゃって」

突如復活するルイ。ざわめく会場。

「あ、やばい。ちょっと遊びすぎたかも」

苦笑するルイ。気付いた時には、会場は引きに引きまくっていた。時たま聞こえる悲鳴と『キヤ〜！ お化け〜！』と言う声。

「あちゃ〜」

頭を抱えるルイ。

「まあ、いいや。とりあえず、倒させてもらっよ」

ケルベロスの首筋に剣をあてがいそのまま引いた。ぼとりと音を立て落下していく首。

「さあ、反撃開始だ！」

そう言い残し気合を入れるルイ。あれだけ血を流してもにっこりと笑っているのだ。そんなルイを見てケルベロスが逃げ出そうとする。本能で危険を察知したのだ。

「逃がさないよ」

そして、ケルベロスに両手を翳す。

「絶大なる炎よ。赤き帝王よ……その姿を爆炎に変え、我に力を与えよ！ いっけー！ 劫火の炎！」

詠唱が終わった瞬間、紅蓮に輝く光がケルベロスを目掛けて一直線に軌跡を描いた。

「あっ！」

短く発せられたルイの声。

そして爆発。土煙をあげる地面。凄まじい衝撃と激しい熱風が闘技場を包んだ。

あれからの位、時間がたったのだろう。

ルイは天井を見ていた。と言うより目をあげたら自然と映ったと言った方が正しい。

見慣れない天井。だが、初めてではない。

闘技場の医務室のベットだ。

ケガをしているのだろうか、打撲の痛みが肩と背中走る。

「……気が付きましたか？」

部屋に居るのは彼一人ではなかった。それは最初から気が付いていた。

視線だけで見ると、若い女性の姿が目映る。

「お師匠様」

ルイがお師匠様と呼んだ彼女は、エリアル・ルシファレス。
年齢は、ルイより二つ上の二十歳。

腰までよりやや長い真っ直ぐな銀髪と、やわらかい印象の顔の輪郭。そして、右の眼は碧眼であり、左の眼は真紅の瞳。ルイと同色でありながら対照的な瞳をしていた。

服装は、柔らかなそうな黒いローブを纏っている。

かなりの美少女のランクに位置されるが、彼女の正体を知っている口説こうとする者は居ない。

——世界一の奇術士。

誰がつけたかは知らないが、それが彼女の通り名だった。魔法に関することなら右に出るものはいない。それが例えば黒魔術や白魔術、ましてや召喚術に至るまですべてを網羅している凄腕なのだ。

「もう、ひやひやさせないでくださいよ。今日の試合で、『捨て身の勇者』なんてあだ名までついたんですから」

がつくりと肩を落とすエリアル。

「でも、頑張りましたね。ルイ」

優しい笑顔がルイに向けられる。

「これで勝ち方がもつとまともだったら良かったんですけどね。自分で使った魔法の衝撃で吹き飛ばされて壁に頭をぶつけて意識を失うのはちょっといただけないです」

まったくその通りである。あの時ルイは、確実に勝利を確信した。と言うより事実、勝つ事はできた。ただ一つの誤算を除けば……。それはケルベロスとの距離だ。爆発を起こした場所があまりにも

近すぎたのだ。無論、ルイは吹き飛ばされ、そのまま壁に激突。なんともみっともない幕切れとなった。

「はあ、そこまで計算してなかった」

ルイはそう言って両腕で顔を覆う。その瞬間ある事に気が付く。

「……あ」

ルイの髪を優しく置かれた手。優しく暖かな光が傷を癒してくれていた」

「あんまり心配をかけさせないで下さい。ルイ」

エリアルはそう言って笑った。

「はは。すみません」

そう言って起き上がり備え付けの鏡を除くルイ。

「でも、大丈夫ですよ。僕は死なない」

ルイはそう言って髪の毛をかき上げた。

鏡に映るルイの顔。紅く、鮮やかな右眼がすべてを捉える。

「あれからもう一年が経ったんですね」

「そうですね」

二人は少し遠い目をした。

「私をもつと場を読んでいれば貴方は死なずに済んだのに」
「また暗くなる」。もういいですよ、その事は」

すっかり自分の死を受け入れたルイ。だが、初めて自分の死と直面した時、自我を失うほど嗚咽したのだった。そして、ルイが命を落とした理由。それは、一つのアイテムが深く関係している。

そのアイテムの名前はラルヴァの剣。邪神記という伝説から生まれた魔剣である。

邪神記とは、この世の中で最も有名で信憑性の高い伝説とされている。

そのあらすじはこうだ。

約三百年前、『カオス・ルーク』と言う邪教徒を集めた宗教団体があった。そして彼等は混沌を司るレグナと言う邪神を作り出した。出した。

レグナは最高の剛力、最高の魔力、最高の知力を手に入れ暴走を繰り返した。

そして、『カオス・ルーク』はこの世を支配する事になる。

だが、多くの国が支配される中、人々は連合軍なる物を作っていた。四精霊に魅入られし者、大聖女ハーネ・ライコスを中心に各国の兵の四人を集めた四聖者と共に戦いを挑んだ。

そして、激闘の末、ハーネは自分の命と引き換えに邪神レグナに打ち勝つ。だが、レグナは死ぬ間際に宝石をモンスターに変える呪いをかけたのである。そして、それは宝石モンスターとして世界に散りばめられた。

こんな何処にでもありそうな伝説だが実際の所、本当の事は判らない。ただ、宝石モンスターがこの世に現れた有力な理由として今でも言い伝えられているのだ。

そして、ラルヴァの剣とは邪神レグナが、愛用していたと言われる魔剣なのだ。この剣を持った者は邪神レグナに取り憑かれ邪心に

満ちる。使用者は破邪となり殺戮を繰り返す続けるのだ。

何故、今ごろになってこの剣が現れたのかは不明だが、二人はこのアイテムのに深く関わる事になった。

そして、二人がこのカオスアイテムと関わる事になった理由。それは二人が就いていた職にある。一年前、彼等は宮廷魔術士と言う職に就いていたのだ。宮廷魔術士。それは、宮廷が……つまり一国が認めると言う魔術士の証でもある。魔道を心得る者なら一度は憧れる称号の事だ。

そして二人は第二十八代目宮廷魔術士と言う称号を得ていた。つまり、この二人は国が認めるほどの実力と言う事になる。

事の発端は一年前。クルツ国、国王ゲイル・ツヴァイルによってこの剣を封印するように命令が下されたのである。

命令を承諾したルイとエリアルはすぐさま使用者を追った。使用者の名はリク・カミール。元は聖戦士だった男だ。

繰り広げられる激しい死闘。そして、運命は訪れたのだった。その戦いで命を失ったルイは、エリアルのネクロミノコンで蘇ったのである。

「あの時ルイが私を庇ってくれなかったら私は間違いなく死んでいました」

「またそういう事を言う。あの状況はあれしか方法がなかったんです。いいじゃないですか。結果的に二人とも助かったんだから。って、それで僕等は職を失ったんだっけ」

ルイはそう言って笑った。

「笑い事じゃないですよ。それに貴方は助かってないです」

がつくりと肩を落とすエリアル。宮廷魔術士と言う肩書きを持っている以上、禁呪を使えば宮廷魔術士を解雇される事は明白だった。

だが、エリアルは職よりも弟子を選んだ。それだけ、ルイの事を大切に思っていたのである。

「でも、リクは何処に行ってしまったのでしょうか」

「さあ」

そして、二人が旅をする理由。それは、ラルヴァの剣の封印、もしくは破壊である。職を失い、剣とは無関係になった今でもその思いは変わる事はない。一刻も早く剣を見つけ出し被害を最小限に抑えようとしているのだ。

「未だ、正確な情報はつかめていないし。はあ、先は長そうですね」
溜め息をつくエリアル。

「僕は、結構楽しんでますよ。お師匠様の事、好きだから」

ルイは、そう言って人差し指を立てた。刹那、真っ赤になるエリアル。

「うっ！ それは、今言う事じゃないでしょ！」

「ははは、お師匠様からかうと面白い」

「……」

眼の座ったエリアル。聞き取れるか聞き取れないかの小さな声で言う詠唱。

「我は願う。劫火の炎！」

「なっ、お師匠様ああああ！」

無論、この後ルイが黒焦げになったのは言うまでも無い。

「ふええええ。痛いよ、熱いよ」

半泣きで訴えるルイ。普通の人間なら間違いなく死んでいる。

「はいはい！ まったくもう！」

そう言つてエリアルは、濡れたタオルをルイに被せた。

上半身に軽いやけどを負ったルイは、当然のごとくベットに横たわっている。

「大体、あなた賢者でしょ。あの程度の魔法は絶対障壁で受け止められるでしょ」

賢者が万能の聖者と呼ばれる理由。それは、ここにある。

——マジックシールド絶対障壁

光と闇の力を同時に発動させると互いの力が中和され、無属性の魔力が生まれる。属性を持たない魔力はすぐに消滅してしまうのだが、その消滅する魔力と同時に相手の魔力もかき消してしまう力がある。つまり攻撃魔法は一切効かなくなる。この力こそが万能の聖者と言われる由縁だった。

「だって、お師匠様ゼロ距離で魔法撃った」

しばしの沈黙。

「はは、はははは。もう大丈夫でしょ。ほら、自分に回復魔法をかけないと痕になりますよ」

「あ、ごまかした」

とは言いつつも、すっかり光の力を開放しているルイ。流石に不
死人に火傷の痕をつけたらゾンビになってしまう。それだけはルイ
も避けたいところだった。

「穏やかな光者よ、悠久の光を我に！ 血よ肉よ、私の傷を塞げ！」

詠唱が終わると何か暖かい物に包まれた感じがした。
消えていくヒリヒリとしたやけど特有の痛み。

「まったく。医務室で何をやってるんでしょうね、私達は」

嘆息混じりにつぶやくエリアル。

「お師匠様の短気」

再びエリアルをからかうルイ。学習能力がないというかなんと言
うか。再び医務室にルイの悲鳴が響き渡った。

夕暮れの道を歩く二人。夕映えは石畳を、いや、全ての物を紅く
染めていた。

他愛のない話をする二人。端から見れば仲のよい姉弟のように見
えるのだろうか、もしかしたら恋人同士と見られているのかもしれ
ない。行き交う通行人は皆こちらを見て笑顔を作る。

「お金は稼いだし、しばらくの宿代も困る事はない！」

今日得た賞金をぐっと握り締めて、ルイは勝ち誇った表情を浮か

べる。

「感謝しています」

につこりと笑うエリアル。宿代を稼ぐのはルイの仕事だ。たまに、危険な時もあるが、自分の存在を消されない限り死ぬことはない。少々荒っぽい闘技場で稼ぐのが一番手っ取り早いのだ。

その代わりと言ってはなんだが、エリアルは昼間情報集めをしている。

「お師匠様の方は、何か進展はありましたか？」

「相変わらず剣の情報はいいですね。でも、別の物がでてきたんですよ」

「別の物？」

足を止め立ち止まる二人。

「レグナの眼です」

「レグナの……眼」

レグナの眼。それはラルヴァの剣と並ぶカオスアイテムである。邪神レグナの眼といわれる膨大な魔力を秘めた真紅の宝玉だ。その宝玉は宝石をモンスターに変えると言う特殊能力を持つと言われていた。このアイテムこそがこの世の宝石モンスターを生み出した原因と言い伝えられているのだ。だが、実際レグナの眼を見たと言う人物は居なく、その仮説を実証できる物がないのだ。

「また微妙な物が」

苦笑するルイ。こう言ったレグナがらみの情報は多数出てくるの

だが今まで一回も当たりが無い。

入ってくる情報もガセが殆どなのだ。中でも一番酷かったのは『レグナの蝶ネクタイ』である。何処の世界に邪神が蝶ネクタイを締めているのだと言っのだらう。とにかく、こつ言つた類のネタは珍しくなかつたのだ。

「この街のはずれにキラベルの洞窟と言っのがあるのは知つていますか？」

「はい、知つていますよ。まだ一度も行つた事はないですけどね。宝石モンスターの巣窟だつて道具屋の親父が言つてました」

「この街にはですね。意外な伝説があつたんですよ。え」と

エリアルはそう言つて懐から何かを取り出す。羊皮紙だ。その羊皮紙には細かい字でびつしりと何かが書いてある。

「あ、ここですね。この部分、この街には邪神記のその後の伝説みたいな物あるんです。大盗賊サイク・ルキアつてご存知ですか？」

「はい。邪神記と同世代に生まれたこの大陸を支配していた盗賊の親玉ですよ。つて言っか、知らない人はいないでしょう」

「ええ。実はですね。生前、彼は自分の遺産と一緒にレグナの眼を封印したらしいんです」

「はあ」

ルイがそう言つとエリアルは少しだけ笑みを含む。

「まだ気が付きませんか？ キラベルの洞窟は、サイク・ルキアの遺産を隠した場所だとしたら？」

「あつ」

ようやく辻褄の合ったルイ。モンスターの巣窟と言われているキラベルの洞窟。そして、レグナの眼の特性。つまり、レグナの眼で遺産をモンスターに変換させたと考えるのが普通だろう。

「なるほど。でも、そのアイテムを手に入れてどうするつもりなんですか？」

「勿論、私の神術でレグナの眼と共鳴を起こさせます。少なくともレグナの魔力はそう簡単に消えないはずですから。うまくいけばリク場所も割り出せる」

「本当ですか？ でも、それって街に伝わる言い伝えなんですよ。だったらこの街の人が既に手に入れていると思わないんですか？ それか、いつもみたいにガセでしたなんて事になるんじゃないんですか？」

物凄く怪訝顔をするルイ。第一、もしあるとしても三百年も前のお宝だ。既に誰かに取られ無い物と考えるのが普通だろう。

「あまいね。甘すぎるよ、ルイ君」

眉毛を少しだけ吊り上げてルイを一瞥するエリアル。キャラが変わっている。気分はすっかり名探偵だ。

「……あんた誰ですか」

ルイの冷静な突込みをさらりと流し再び口を開いた。

「レグナの眼はモンスターを生み出すアイテムですよ。つまり、あ

の洞窟にモンスターが居る以上それはありえないのです！」

人差し指をルイに突きつけた。まあ、もったもな意見だ。

「で？ お師匠様はそこにレグナの眼がまだあるとお考えで」

上下に首を振るエリアル。

「大丈夫ですよ、私達の力なら」

確かに色々な意味で大丈夫だろう。

「そうかなあ」

自信なさ気に呟くルイ。

「ルイ。貴方の悪い癖はすぐ内向的に考える。もっと前向きに生きなさい」

渋面を作りエリアルを一瞥し『お師匠様のその自身は何処から来るの？』と心の中で突っ込みを入れるルイ。

「さあ、行きますか？ 止めますか？」

「……あまり、気乗りがしないけど、どうせ止めても聞かないんですよ」

「流石ルイ。よくお判りで」

「仕方ないです。行きますよ」

これも、リクを見つける為だと思いしぶしぶ頷くルイであった。

第二話 キラベルの洞窟

翌日。

二人はゲートの街を歩いていったの位歩いたのだろう。

周りは人の賑わいは無くなっている。と言うより人が居ない。整備されていた石畳の道もいつしか、土へと変わっていた。

先ほどから無言のエリアルとルイ。モンスターの巣窟と言っただけあつて、緊張しているのだろうか？

そして、二人は足をとめた。目の前に広がる大きな洞窟。

「どうやら着いたみたいですな」

「ここがキラベルの洞窟？」

静かに、頷くエリアル。

街外れに位置するこの洞窟は、何の整備もされていない荒地に、ぽつかりと口を開けていた。

そして、この洞窟がサイク・ルキアの遺産が残されていると言われている洞窟である。

「準備はいいですか？ ルイ」

大きな入り口、大きく跳躍をしても天井には届かないだろう。それぐらい広い。中を覗いて見ると暗くて良く見えない。奥は相当深いようだ。

決意を固めて息を大きく吸い込んだ。刹那、顔を引き締める。

「いつでもどうぞ」

ルイの返事にゆつくりと頷くエリアル。
その頷きを確認し、中へと足を進める。

中は少し肌寒く凜としている。いかにもモンスターが好みそうな場所だ。

少し歩くと、すぐに日が差し込まなくなり辺りは暗澹に支配された。

横に居るエリアルの姿すら見えなくなっていた。

「あらら。真っ暗」

呟くエリアル。

何も見えない。こんな時に、モンスターに襲われたらひとたまりもない。

「ルイ。お願いします」

「はい。我を照らす真実の炎よ。尽きることの無い悠久の輝きを今ここに！」

詠唱を終えると鬼火のようなものがルイを照らし出した。

「これでよし、ってね」

炎独特の光が、足元を照らす。洞窟は無数のコケが生えており、不気味な雰囲気醸し出している。また、岩で囲まれた洞窟は、奇妙な圧迫感を生み出していた。

「何か……いやだなあ」

苦笑を浮かべるルイとエリアル。だが、まだ始まったばかりである。再びゆつくりと、そして慎重に足を進める。

凹凸の激しい地面。時折吹く乾いた風が、またなんとも言えず微妙だった。何かをして気を紛らわせたいのだが、今は歩くこと以外何もできない。苛立ちが募る。その時だった。

——カシャン。

「うん？」

「何か聞こえましたね」

遠くのほうから小さく音がした。

——カシャン。

再び聞こえる音。だがそれは、確実に大きくなっている。

乾いた物質がぶつかり合うようなそんな感じの音。

そして、その姿を鬼火が照らし出した時、ルイは、この洞窟で初めて剣を抜いた。

モンスターである。白く、細身の身体……というより骨だけである。手には折れた長剣。独特の歩き方。ただ目の前の敵を攻撃すると言う本能だけで動いている。それは、モンスターに意思が無い事を告げていた。

「やっぱり、まだレグナの眼があるって事ですかね」

眼をぎらつかせるエリアル。

「まだ言ってるんですか、そんな事。相手が骸骨剣士だから余裕なのかも知れないけど」

骸骨剣士。比較的、弱い部類に分類されるモンスターだ。

「ルイ！ 頼みましたよ」

「了解」

ゆつくりと剣を構えるルイ。

「さあ。……行くよ」

ルイはそうつぶやくと凄まじい殺気が放つ。

カタカタと音を立て、骸骨剣士は剣を振り上げた。緩慢な動き。刹那、骸骨剣士の腕は振り下ろされた。かわすことの出来ない速度ではない。だがルイは、あえてそれをかわさずに剣で受け止めた。続けて、剣を跳ね上げ、相手がよろけた隙に骸骨剣士の右手を斬り落とす。落ちた拍子に、粉碎する腕。

「そんなので僕を倒せる訳無いだろう」

よろめく骸骨剣士。武器さえなくしてしまえば後の始末は簡単である。

「これで、終わりだよ」

そう言つて逆袈裟に斬り付けた。

ルイの持っていた長剣は、骸骨剣士の首の部分に引っかかり、首の部分が弾かれる。

首の落ちた骸骨は、いとも簡単に崩れ去った。

「なんだよ。あっけないな」

息を抜くルイ。骸骨剣士が宝石に変わったのを見て警戒を解く。

「そんなに油断していいんですか？」

「大丈夫ですよ、お師匠様。僕、死なないし」

笑みを作り剣を鞘に収めた。その瞬間。

「ぐああああ！」

左足に信じられないほどの激痛が走る。

足が熱い。焼けるようだった。裾を上げてみるとその理由がわかった。ルイの足は爛れていたのだ。まるで硫酸をかけたように。

そして、足に纏わりついている液体。スライムだ。

「先ほどからずっと居ましたよ。そのスライム」

呆れた顔をするエリアル。

さっきの骸骨剣士との戦いに夢中でその存在にまったく気が付かなかったのである。

「知ってるなら教えてくださいー！」

「まったく、しっかりしてくださいよ。少し熱いけど我慢しなさい！ 絶大なる炎よ。紅き帝王よ！ 我と共に敵を討て！ 集え炎よ」

ある程度、距離を置いた所での詠唱。

そして、巻き起こる火柱。その火柱はスライムを目掛けルイもろとも呑み込んだ。

ジウウウウと言う音がしたと思うと、スライムは消えてなくなっていた。蒸発したのだ。それと、ほぼ同時に『ぎゃあああ』と言う声も聞こえたがこの際気にしないでおう。

煤だらけになったルイの姿。スライムが煤になり付着したのだから。

「はあ、私の弟子がスライムに負けたなんて世間に知れたら……」

懇願するエリアル。皮肉たっぷりである。

「いくら、死なないとは言えもう少し気を配りなさい」

「……はい」

反省するルイ。

何はともあれ緊迫した状況は切り抜けた。あのスライムのいた場所にはきらきらと光る宝石が残されていた。

「さあ、わかったら自分に回復魔法をかけなさい。痕になりますよ」

「はい。穏やかな光者よ、生命の光を我に！」

『痕になるのがわかってるならやらないでよ！』とは口が裂けても言えないので頭の中でばやくルイ。

いきなり前途多難だがこの洞窟はまだ始まったばかりなのである。

二人は再び歩き出した。

どれほどのモンスターを倒したのだろう。

また、どれだけこの洞窟を攻略できたのだろう。

まったく見当がつかない。それぐらいこの洞窟は広いのだ。

「我は願う！ 劫火の炎！」

響き渡るエリアルの声。飛び交う呪文。相変わらず、モンスターは尽きることは無い。

「はあ、疲れた」

湿気を帯びた岩肌にもたれかかるルイ。

「お師匠様。少し休みませんか？」

ルイの表情に疲労が浮かぶ。それは、エリアルにも言える事だった。

肉体的には、すでに限界を迎えているのだろう。足がふら付いている。後の事を考えずに敵と戦った結果だ。

「これだけモンスターが居るんです。絶対、レグナの眼はこの洞窟にあると見ました」

「確かに。少しだけ信じなくなりました」

これだけ大量のモンスターが要るのだ。宝の一つや二つあってもおかしくはないだろう。

「ただ、一つ言いたい事があります」

ルイは大きな溜め息をついた。

「このモンスターの数、多すぎでしょ」

二人の目の前に広がる物。それは、無数の宝石だった。鬼火に照らされ輝きを放つ宝石。だが、言い方を変えればそこにある宝石の数だけ敵を倒したのだ。元ではあるが宮廷魔術士の名は伊達ではないと言う事だ。

「それだけの資産家だったのでしょ。サイク・ルキアは」

溜め息をつくエリアル。

「はあ、今日は引き上げますか」

「そうで……」

遮られるエリアルの声。

「何？」

遠くから聞こえる咆哮。低く震えるような声で空気が振動している。

ケルベロスだ。

こんな時でもモンスターは襲ってくると言うことだ。

「まずい。ケルベロスか」

早急に剣を拾い立ち上がる。近づく足音。

「お師匠様。戦う気力は？」

「戦いたくない。……とも言ってられないですね。来ますよ。気を付けて」

流石にエリアルも危険を察知したのか臨戦態勢に入っている。

そして、鬼火にケルベロスの姿が映し出された時二人は驚愕した。自分達が予想していた物と大分違っていたのだ。

「マジかよ」

先日ルイが相手にしたケルベロスよりもはるかに大きいのだ。

「ちょっと厄介ですね」

「ちよつとで済むんでしょうか？」

「さあ、それは貴方次第です」

エリアルはそう言って笑った。

「行きますよ！」

「了解！ お師匠様。援護、お願いしますよ」

「ええ、任せてください」

頷くエリアル。それを確認したルイは地面を蹴った。

一瞬にして詰まるケルベロスとの距離。

「うおおおおお！」

振り下ろされる剣。ケルベロスの首に走る閃光。確かな手ごたえが剣を伝いルイの手に伝わる。

だが、途中で剣は何かに遮られた。骨である。鋼鉄のように固いケルベロスの骨が剣の軌道を遮ったのである。

「なっ！」

予想以上に甲殻なケルベロス、闘技場にいた養育されたケルベロ

スとは段違いである。
そして次の瞬間、右腕に激痛が走った。ケルベロスが噛み付いたのである。

「うがあああ！」

広がる激痛。乱杭歯がルイの右腕を砕く。

「ぐがっ！ 絶大なる……炎よ。紅き帝王よ！ その姿を爆炎に変え、我に力を与えよ！」

零距离からの炎の魔法。炎は噛み付いている一本の首を焼き焦がした。

「弾けるおおお！」

凄まじい咆哮。その声と同時に爆炎に姿を変えた。爆風により燃えていた首は弾け飛んだ。

二段魔法。以前エリアルが教えてくれた高等魔術だ。本来、魔法のイメージとは、最初に思い浮かべたイメージしか適応される事はない。だから、最初にイメージの方に細工を施して発動させるのだ。ようやく、乱杭歯から開放されるルイ。

「ルイ！ 退きなさい！」

後方から聞こえる声。ルイは、その声が聞こえるのと同時に横に跳んだ。

「光を司る鬼神よ、音より速く、漆黒を切裂く力を我に！」

刹那、エリアル両手から一筋の光が放たれた。

吹き荒れる風と凄まじいほどの熱量。研ぎ澄まされ、圧縮された光は一直線にケルベロスへと向かっていく。

光の槍は燃えていたケルベロスをいとも簡単に貫きそして宝石に変えた。

「ルイ！」

駆け寄るエリアル。心配そうにルイの腕を見る。

「はは、ちょっと噛まれちゃいましたね」

ルイは痛みを堪えながらはにかんだ。地べたに座り込み、光の魔力を開放している。骨を粉碎されたのだ。既にちよつとのレベルではない。

「まったく、もう。笑い事じゃないですよ。あまり心配させないでください」

エリアルは、そう言って安堵の息を漏らす。

「ほら、手を貸してください」

差し伸べられるエリアルの手。

「はい」

空いている方の手で、エリアルの上を掴むルイ。そして、体が引き起こされる。……はずだった。

「きゃっ！」

エリアルも疲労の為か相当足にきていたらしい。ルイに覆い被さる感じに倒れてしまったのだ。

「痛たたた、大丈夫ですか？」

「はあ、痛いけど幸せ」

幸せそんな笑顔を浮かべるルイ。だが、それはすぐに遮られた。

「うおっほん。あんな大きなケルベロスを倒すなんて、さすが元宮廷魔術士って所かな？」

わざとらしい咳払いと絶妙なタイミングでかけられた声。女の声だ。

「いちやつくのもいいけど洞窟じゃムードが出ないっすよ。先輩」

続いて聞こえる別の声。

「誰だ！」

声のほうを振り向くと二人の男女だった。

二人ともかなり若い。ルイと同じくらいかそれより年下だ。

男の方はやや拗ねた様な顔立ち。服装は軟らかそうなローブを纏っている。服装から言って純粋な魔法使いなのだろう。少し、華奢とも思える。だが先入観を打ち消す物が彼にはあった。燃えるような真紅の髪と同色の瞳、吸い込まれそうな紅が凄まじい威圧感を醸し出していた。

そして、もう一人は、鉄でできた胸当てに同じく鉄でできた盾を

左手に装備している。剣士と言った風貌だ。白い肌。腰まである褐色の髪は一本に結われていた。やはりルイ同様、動きやすさを重視しているのだろう。ただ、彼女の場合もつと高い位置で結つてあるためポニーテールと言ったほうが正しいだろう。

「貴方達は誰なんです？ 私達の事を知っているみたいですけど」

問い掛けるエリアルに男は不適に笑った。

「へへ、第二十九代目宮廷魔術士レン・クロイツ。基本職は魔術士かな」

「同じく第二十九代目宮廷魔術士クリストファー・シルフィード。私は聖戦士だよ。ちなみにクリスって呼んでね」

少し、照れくさそうに自分の名を名乗る二人。だが二人とも活気に満ちた声だった。

第二十九代目宮廷魔術士、つまりルイとエアリアルの後継と言うことになる。

「へ？ 貴方達が？」

素っ頓狂な声を上げるエリアル。

「ええ、何かご不満でも？」

クリスは、そう言って懷から何か出した。ペンダントだ。鬼火に照らされたそれは、きらきらと乱反射している。揺らめく炎をモチーフにしたペンダント。それは、酷く見覚えのあるものでもあった。

『魔力の紋章』

エリアルとルイの声が綺麗に重なる。

魔力の紋章とは、宮廷魔術士を証明するためのペンダントである。初代宮廷魔術士から今まで代々受け継がれているのだ。一応、ルイとエリアルも身に付けていた事はある代物だ。

「これで俺達が宮廷魔術士だって信じてもらえたかな？」

にっこりと笑うレン。

「ま、まあ、一応は。で、その宮廷魔術士が一体なんの用なのか？」

「実はっすね。国王からラルヴァの剣を封印しろと言う指令を受けまして……」

レンは、これまでの経緯を二人に話した。

「……あのおっさん。性懲りも無く、ラルヴァの剣の封印を依頼したのか」

がつくりと肩を落とすルイ。

「それで、レグナの眼が眠ると言われているこの洞窟を目指したと」

エアリアル 의견に頷く二人。どうやら、この二人も考える事はエリアル達と一緒にだったらしい。

「んで、利害一致したと言う事で……」

酷く言いにくそうにするクリス。

「仲間になってください！」

その言葉に顎が外れそうになるルイとエリアル。

「あ、貴方達。 宮廷魔術士になる時に契約書は読まなかったんですか？」

「契約書？ ああ、めんどくさかったんでそのままサインして出した」

「俺も」

二人の言葉に頭を抱えるエリアルとルイ。 しかも、『仲間にしてください』ではない所がまた素晴らしい。

「あのね、宮廷魔術士って言うのは民間人を仲間にしちゃいけないんだよ。 仲間にして良いのは、宮廷が認めた人物だけなんだ」

苦笑しながら説明するルイ。

「それだったら問題ないっす」

がさごそと懷から何かを漁るレン。

「ハイ。これ」

レンが懷から取り出した物は一枚の手紙だった。 封をしている蠟燭には、しっかりと宮廷の刻印が押されている。 手紙を受け取り、恐る恐る封書を取り出す。

——ぷりーず・へるぷみい

言葉を失う二人。たった一行に綴られた言葉は何より呆れさせた。しかも、やたらと可愛らしい文字で『国王、げいるたんより愛をこめて』と書いてあるのが更に二人のやる気を削いだ。

「……キィ〜〜〜！」

ようやく正気に戻ったエリアルが、発狂しながら手紙をビリビリに破く。

「お、お師匠様が壊れた」

こうして、二人は宮廷認定の民間人となったのだった。

「わあゝ。私、初めて見たよゝ」

興味心身にルイの頭を抱えるクリス。ゲートの街で唯一の宿『無双亭』の食堂にクリス声が響いた。

「俺も初めて見た」

二人が見ている物。それはルイの顔……ではなくルイの額にある六芒星の痣だった。

「本当だ、心臓の音してない」

レンがルイの胸に手をあてがった。

「ああ、もう！ さつきから気持ち悪いよ！」

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、ルイが二人の腕を振り払う。

「悪いけど、僕は見世物じゃないんだよ。それに、この痣が他人に見つかったら化物扱いされるかもしれないんだ。そんなのはごめんだね」

そう言ってバンダナを巻き直すルイ。

「そうですよ。幸い、ここには私達しか居ませんけど死体が動いているなんて知ったら誰も近づいてきませんよ」

地味に酷いエリアルの発言。そして、あえて聞き流すルイ。

「でも、ルイ先輩もずるいな」

「何が？」

レンの問い掛けに聞き返すルイ。

「だって、こんな美人なお師匠様と毎日一緒に居るんですよ。だったら、毎日がウハウハのムフフじゃないですか」

微妙な擬音が続いたが、言いたい事は大体分かる。それは、男としての性なのだろう。

「うん、幸せなのは幸せなんだけどね。お師匠様、寝相が悪いから大変なんだよ」

そう言って笑うルイ。

「へえ。誰が、寝相が悪いつて？」

持っていたフォークをルイに突き付けるエリアル。

「ぼ、僕です」

ぶわわっと涙を流すルイ。

「よろしい」

そう言つとエリアルはフォークを下げた。

「あれ？　どうかしたんですか？　二人とも」

ぶるぶると首を振り、脂汗を流すクリスとレン。

「もしかしたら、エリアルさんって剣士の素質あるかも」

「嫌ですねえ、褒めても何も出ませんよ」

と言つて笑うエリアル。『褒めてない』と喉まででかかったが何とか我慢する三人。

何はともあれ、こうして長い一日は幕を閉じた。

第三話 魔窟

四人がパーティを組んでから三日が経った。

「……」

黙りこくる四人。そんな中、レンの腕だけがすらすらと動いていた。羊皮紙の上を這う一本の羽ペン。そして、そこには絵が描かれている。地図を書いているのだ。

「どう？ 上手くマッピングできてる？」

クリスの声が洞窟内に響く。

「ああ、一応はできてるよ。大体あってるよ」

自分の書いた地図を確認するレン。

と言うのも、この洞窟は本当に広く、そして幾重にも枝分かれしているのだ。時には行き止まりの箇所を発見したり、時にはモンスターの巣窟を発見したりと様々である。

先日など、帰り道が解らなくなり、迷子になると言う惨劇が起きた。何とか出られたものの、外はすでに暗澹に包まれていた。つまり、深夜になっていたのである。今まで、ある程度モンスターを倒してからマッピングを行なえばいいと考えていたが、それが教訓となり、常時マッピングをして行く事になったのだ。

そして、目の前には三つに枝分かれした道。まだ、マッピングしていない道である。

「もう、迷うのは嫌です。お願いしますよ、レンさん」

エリアルに念を押されるレン。

「へいへい」

嘆息しながらも地図に印を加えるレン。

「まずは右から行こう」

的確に指示を出すレン。順を追っていかないと必ず道に迷う。マッピングをする上では外せない行為だ。

「あいよ」

歩き出す四人。

だが、その足はすぐに止まった。

「ったく。この洞窟は何匹モンスターがいるんだ？」

「さあね」

毒づくレンと相槌を打つクリス。

黒い毛並み。そして、狼を思わせる四肢と胴体。印象的な鷹の顔と翼。^{シムルグ}翼獣だ。そして、その隣には小脇に自分の首を抱えた首無し
の鎧。デュラハンだ。右手には大剣を持っている。二匹とも今日初めて戦う敵だ。

「ルイ君、鷹と鎧どっちがいい？」

「うん。鎧かな？ 動き遅そうだし」

二人は、そう言って鞘から剣を引き抜く。

「了解。翼獣は引き受けた。レン！ 援護を頼むよ！ ルイ君とエリアルさんは鎧を頼んだ！」

「おう！」

「行くよ！」

バックステップを取るレンと疾風の如く斬り込みに行くクリス。凹凸のある洞窟ではある程度、スピードは殺されてしまう。にもかかわらず、クリスと翼獣との距離は一瞬にして詰められた。凄まじい瞬発力である。

「うおおおおお！」

クリスの咆哮と共に、閃光が走る。洞窟内に響く翼獣の奇声。痛みに耐えるような鳴き声だが致命傷ではない。

「すごいな、って感心してる場合じゃないんだよね。僕達もやらないと。おい！ こっちだ！」

声に惹かれるようにデュラハンの足がルイに向けて動き出す。

「来た来た。悪いけど、すぐ片付けさせてもらっよ」

ルイはそう言って右手を翳した。

「お師匠様。行きますよ」

「ええ」

『暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの雷！』

重なる声。刹那、二つの蒼の軌跡がデュラハンに走った。

パリパリと電撃特有の音が洞窟内に響く。

計り知れない衝撃と、光がデュラハンを包む。

衝撃で陥没した鎧。だが、その足は止まる事無く、こちらに向かってくる。

「さすが、丈夫だね。だけど――」

ガッ！

金属音が後方から聞こえた。何か、金属が堅いものにあたった様なそんな音が。

硬直するルイ。頬からは一筋の血が垂れていた。

「な、何が起きた？」

何が起きたか把握できていないルイ。だが、状況を理解するのは容易い事だった。

デュラハンの持っていた大剣が無いのだ。つまり、デュラハンは剣をブーメランの様にして投げたのだ。

「……やってくれたね」

殺気立つルイの眼。

そして、その直後に爆音が響く。炎の魔法だ。しかも、二段魔法。ひしゃげた鎧は、すでに原型を留めていない。爆発の衝撃で押し潰されたのだろう。所詮、デュラハンとは鎧と宝石を媒体にした、亡霊でしかない。媒体を失えば自然と消滅するのだ。さらさらと砂に姿を変える鎧。後には宝石だけが残されていた。胸を撫で下ろすルイ。

「ルイ！ 落ち着くのはまだ早いですよ」

駆け寄るエリアル。

刹那、洞窟内に声が響いた。

「レン！」

凜としたクリスの声。そう、戦闘はまだ終わっていないのだ。
声のした方を向くとクリスに向けて、猛スピードで翼獣が突っ込んでいた。

「聖なる光に包まれし聖女よ。その威光を蒼い冷氣に変えて、我に蒼の氷槍を与えよ！」

詠唱が終わった瞬間、きらきらと光る粒子が槍の形を作る。氷で槍を作ったのだ。

「いつけ〜！」

氷槍はレンの声にあわせて弾丸の如く飛んで行く。そして、見事に翼獣の額に突き刺さった。

「うりゃ」

そこを透かさずクリスが斬りつける。洞窟内に響き渡る絶命。翼獣は宝石に姿を変えた。

「楽勝！」

そう言ってクリスは、その宝石を拾い上げ腰に下げている袋に入

れた。

「本当に楽勝？」

突っ込むエリアル。その突込みに対して片眉を上げるクリス。どうやらその言葉が気に触れたらしい。負けずと口を開くクリス。

「ごめんなさいね。私、エリアルさんみたいに年増じゃないから、戦闘経験少なくて」

クリスがそう言った途端、ぶちつと何処かで、何かがキレる音がした。それは、間違いなくエリアルの中頭の中で血管が切れた音なのだが。

「あら、そうね。ごめんなさい、気が付かなくて。まだまだ発達してないですもんね、特に胸とか」

言葉の一つ一つが重い。と言うより痛い。

「ルイ先輩。行こうか」

そそくさと羊皮紙と羽ペンを取り出すレン。

「そ、そうだね」

足を進める二人。

その日、洞窟の中を異様な殺気が支配したのは言うまでも無い。

「……よし」

羊皮紙に描かれた線が止まった。かなり長い距離を歩いた気がする。単に足場が悪く歩いた感じるするだけかもしれないがそんな気がした。

「これで、マッピングは完成！」

歡喜に溢れるレンの声。だが、これは現実逃避に過ぎない。

「レン。現実を受け止めようよ」

滝の様な涙を流すルイ。同じようにレンも涙を流していた。四人の前には階段があるのだ。地下に深く伸びる階段。その先は魔法で作りに出した鬼火でさえ照らし出すことが出来なかった。

だがここまで来たのだからと言う気持ちが強くなり誰かひきかえそうとは言うものは居なかった。ゆっくりと一步一步、慎重に階段を降りる。長い長い階段。ルイが鬼火を大きくしたが下が見えない。

「何処まで続くんのだ？ この階段は」

相変わらず足場が悪い。階段自体が風化してボロボロなのだ。はつきり言って歩きづらい。

「何か、地獄への入り口って感じっすね」

「何言ってるんですか。もう階段終わりますよ。ほら」

指を刺すエリアル。遠くの方で階段が途切れている。ようやく階段を下りきるのだ。平坦な地面。だが、同時にそれは見たくは無いものも映し出した。

「……嫌な予感」

犬型のモンスター。見慣れた三本首。見かけはケルベロスとあまり変わらない。ただし、一つだけケルベロスと異なる部分がある。ゾンビ化しているのだ。腐りかけた体。まるで爛れた肉だ。

「あれって、ガルムじゃない？」

「……」

「……」

沈黙が辺りを包む。

地獄の門番として恐れられている存在、ガルムとケルベロス。そして、ガルムとケルベロスの強さを比較するとガルムはケルベロスの三倍は強い。

どうやらこちらの存在には気が付いているらしい。ゆっくりとこちらに足を進めてきている。

「レンのヴァカ……！」

クリスの慟哭の叫びを残し、逃げるようにして階段を駆け上る四人。

「レンさんが地獄の入り口、何ていうから」

「あそこにあれが居るのは偶然っす！」

一瞬にして階段を上りきる四人。平地……と言ってもかなり足場は悪いがこの程度だったら戦うことは出来るだろう。

「ルイ先輩！ 相手はまだ階段を上っている最中です。魔法を撃つて多少でも弱らせましょう」

「了解！」

そう言ってレンとルイは両手を階段に向けて翳した。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！」

「絶大なる炎よ。赤き帝王よ！ その姿を爆炎に変え、我に力を与えよ！ 我は願う、劫火の炎！」

ほぼ同時に発動するレンとルイの魔法。

幾重にも重なる真空の刃と火柱。放たれた炎は風に乗り、灼熱の竜巻を巻き起こす。

「いつけ〜！」

二人の声が洞窟内に響く。二人の起こした竜巻は階段を下っていく。

そして数秒後、洞窟内に轟く雄叫び。そして、轟音。

「まずい！ 皆、僕の後ろに隠れて！」

ルイがそう叫ぶと、再び両手を前に翳した。

うつすらと乳白色の光を放つ両手。絶対障壁を展開した証である。刹那、大気が振動を始める。低い地鳴り。

「来る！」

ルイが短くつぶやいた瞬間、凄まじい炎と真空波が四人を飲み込んだ。

先ほど二人が放った魔法だ。ガルの吐く炎で跳ね返されたのだ。

「うおおおおお！」

気合を入れるルイ。

少しでも気を抜いたら四人とも黒焦げだろう。吹き荒れる熱風。そして、炎を纏った竜巻。空気は乾燥し、雑草などのあらゆる物に引火する。岩壁は赤く焼け、そして風化する。その渦中に四人は居るのだ。

「消えろおおおお！」

渾身の叫び。徐々に消えていく炎。治まる突風。

「助かったっす」

へなへなと崩れるレン。

「やるうゝ。さすが賢者だね」

歓喜の声を上げるクリス。

「何馬鹿な事言ってるんですか。これから来るんですよ」

まったくその通りであった。今のはガルの一撃に過ぎない。そして、すべてが治まった時、見たくない姿が光に曝された。不気味に伸びる三つの首。狼の様な四肢。荒々しい乱杭歯と光の宿る眼。異形とも言えるその姿は、まさに地獄の門番と言う通り名が相応しい。だが悲劇はそれだけでは終わらなかった。おまけが付いて来たのである。

極めて人間に近い体つき。だが、それはあくまで体つきだけだ。

厳つい顔。そして、長く伸びた爪、全身を堅い鱗で覆っている。竜人だ。^{ニョート}
^{ドラゴ}

「クリス。竜人の相手できる？」

「出来なくてもやれって言うんでしょ」

「うん。ごめんね。レン、君はお師匠様と一緒に僕の援護をしてもらっていいかい？」

「判ってますよ。あんまり気は進まないけどやるしかないっす」

ゆつくりと剣を引き抜くルイ。

「お師匠様。あいつの気を引くことは出来ますか？」

「当然でしょう」

エリアルはそう言って小さく詠唱した。放たれる火柱がガルムを飲み込む。

「ありがとう、お師匠様」

そついい残し、ルイは地面を蹴った。剣を構えガルムに向かって走る。縮まる距離。

渾身の力をこめて首を叩き斬る。剣は鋭く軌跡を描き、一つの首が地面に落ちた。

「——うげっ！」

だがその切り口はすぐに再生を始め首の形を成した。

「気持ち悪い！」

再びルイは剣を振り下ろした。

一方、クリスの方は竜人を相手に苦戦していた。俊敏な動きも厄介なのだが、それ以前の問題がある。岩のように堅い鱗。鉄壁の守りによってほとんどの太刀筋は弾かれてしまう。

激しい攻防。竜人は思ったよりも力が強く、そしてその攻撃一つ一つが重い。剣で防ぐと言うよりも剣を使って攻撃の軌道を受け流すと言う感じだった。

袈裟斬り様に爪を立てる竜人。

「堅いんだよ。あんた！」

振り下ろされた竜人の爪を受け止めながら毒づくクリス。重い攻撃に手が痺れる。

「くっ！」

その状況に耐えられなくなったクリス。剣で爪を弾き上げ怯んだ隙に、腹部を突いた。一点集中すれば堅い鱗も貫けると考えたのだ。そして、クリスの考えは当たっていた。

肉が裂ける感覚が剣越しに伝わってくる。身体の構成が堅いから余計に手ごたえが気持ち悪い。

「早く宝石に変わりなさいよ！」

突き刺さった剣を更に深く突き刺す。

震える手。クリスの慟哭の叫びが洞窟に響く。

だが竜人は、一向に宝石に変わる気配は無い。それどころかこの状態からもお爪を突きたてようとする。

「くっ、負けるもんか！」

渾身の力を込めて突き刺さった剣を横薙ぎにするクリス。

「うおおおお！」

咆哮を上げ剣を薙ぐ。

——ガキン。

鈍い音。クリスの剣が音を立てて折れた。

「うそ」

根元からぱつきりといった剣を見て呆氣に取られるクリス。

丈夫過ぎる竜人の肉体。剣を失った今、こうなってしまうてはもうどうする事も出来ない。刃先は見事に竜人の腹部に刺さったままだ。

刹那、

「三人とも伏せて！」

凜としたレンの声が後方で響く。

その言葉に即座に反応する、三人。

「蒼い衣を纏いし者。すべてを蒼に染める水帝よ！ 偉大なる汝の力を示せ！ 我は願う！ 蒼の刃！」

レンを中心に円形の水幕が広がる。一筋の、鋭い刃と化した水。

鋭く薄い水の刃は、すべてを薙ぎ払いそして消えた。勝利を確信した四人。だが信じられない光景が目の前に広がる。

三つの首を失ったガルム、だが、奴は生きていた生きていた。レンの放った一撃は、竜人を切裂き、ガルムの首を薙ぎ落とした。だが、竜人は倒せた物のガルムは再生を使って防いだのだ。

「しとめ損ねたか」

毒づくレン。

「クリス！ これを！」

ルイは、そう言つて愛用の剣をクリスに投げた。ガランと音を立ててクリスの足元に落ちる。

「僕は、魔法で応戦する」

ルイはそう言つてガルムに向けて右手を翳した。落とされた三本の首はすでに再生を始め首を形成している。奴を倒すには身体全体をばらばらに切裂くしかないのだ。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！」

幾重にも重なる真空の刃が、再生中のガルムに向けて放たれた。

「グオオオオオオ！」

刹那、凄まじい咆哮が洞窟内に響く。振動は超音波となり、洞窟を揺るがす。真空はあっけなく旋風へと姿を変えた。

「くそっ！」

「ルイ！ アンデット系は燃やすのが一番です！ そうすれば再生が出来なくなる」

後方から聞こえるエリアルルの声。そして、詠唱。

「金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！」

甲高い音をたてて、真つ白な閃光が火柱をあげる。

「絶大なる炎よ。赤き帝王よ！ 我は願う、劫火の炎！」

続けて、ルイの魔法が発動。ガルムに向けられた紅蓮に光が軌跡を描く。

そして爆発。

爆発で岩が砕け粉塵が舞い上がる。視界を断たれた洞窟内。

「しまった！」

厄介な事にガルムの生死を確認する事が出来ない。

「くっ、逃げますよ」

少なくとも再生する時間は稼げたはずだ。

全力で走る四人。

どれほど走ったのだろう。息が上っている。

ガルムの姿は疾うに見えなくなりいつの間にか光が差し込む場所まで来ていた。

自然の光。強烈な光が瞳孔を突く。

「うわっ！」

固く瞼を閉じるが、瞼を通じて光が差し込んできた。

「はあ、あそこでガルムは反則っす」

嘆息するレン。

「それに竜人なんて私初めて見たよ。おかげで私の剣折れちゃった」
見事に柄だけとなってしまったクリスの剣。もうこうなっては剣
とは言えないが。それを見て、嘆息の息を漏らすクリス。

「僕の剣も、刃毀れ多いしもうこの装備だとちょっと不安かも」

剣をクリスから受け取り光に当ててみる。刃毀れが多く、よく見
るとつつすらとひびまで入っている。

「なんかすぐ折れそう」

苦笑するルイ。ルイ御一行は、まさにボロボロと言った感じだっ
た。

「新しい武器買いに行きましょうか」

無難な提案。四人は洞窟を後にした。

第四話 新旧激突！

「つらっしゃい！」

店の奥から覇気のある声が聞こえてきた。

小綺麗な店内。棚に飾ってある、武器、防具。それと様々な薬草の類。まさに道具屋と言った感じだ。広い店内はそれなりに儲けている証拠だろう。

クリスは、そのまま店のカウンターまで進み、腰につけていた袋を差し出した。

「この宝石をお金に変換したいんですけど」

エリアルはそう言って腰につけていた袋を店員の前に差し出す。

「あいよ」

店主はそう返事をして宝石の数を数える。優に千を超える宝石。

「うーん。よくこれだけ貯めたねえ」

「ええ、苦労しましたから」

「これだったら、九万ギグスで買い取るよ」

「九万ギグスですか。いいでしょう。商談成立」

一枚一枚渡される金貨。この大陸では主にギグスと言う通貨が用いられる。世界を共通してボークと言う通貨があるのだが、クレハ大陸では大抵は、このギグスが主流となっているのだ。

とは言いつつも結局の所、ギグスでもボークでもデザインが違う

だけで素材は金だ。値打ちは大して変わらないのだ。

「さあ、お金も入ったし、おじさん。何か良い武器無い？」

「良い武器ねえ。ちよっと待っててよ」

そう言ってカウンターからいろいろと取り出した。

その種類は、モーニングスターに暗殺者用の短剣。ルイの使っていたロングソードやブロードソードのライトファイター向きの片手で持てる剣。そしてバスターソード、ツインヴァイパーと言った両手持ちの強力な武器、はつきり言っただけで選り取り緑である。

「お姉ちゃん。見た所、剣士だろ。これなんか、おじさん的に勧めめておくよ」

そう言っただけで店主は一本の剣を取り出した。

朱色に染められた両刃の刀身。翼を広げた鳥をモチーフにしたのだろうか、両翼を広げた銀色の柄。その剣の全てが印象的だった。

「珍しい刀身だろ。闘神の剣って言っただ」

「切れ味は？」

「使ってみるかい？」

手渡される剣。驚くべき事に重さがあまり感じられない。大抵、剣と言うのはそれなりの重さがある。それは、袈裟斬りにした時に本来の力に加えて剣の力で、重い攻撃にする為である。

「何、この剣。……軽い」

「驚いたろ。切れ味を見たらもつと驚くぞ。ほれ」

店主はそう言っただけで一枚の銅貨を指で弾いた。一ギグスだ。様は斬

つてみると言いたいのであろう。

クリスは、含み笑いを浮かべ腕を動かした。刹那、弾かれたギグスは空中で一瞬停止し、そのまま引力に引かれ地面に落ちた。

「マジで？」

驚嘆の声を上げる三人。地面に落ちたギグスは八等分されていた。最低四回は斬りつけたということになる。

「切れ味もいいね。気に入った。おじさん、これいくら？」

「二万ギグスでどうだい？」

「買った」

即決したクリス。ほくほくとした表情を浮かべている。

「おじさん。じゃあ、僕に合う武器ってある？」

刃こぼれした長剣を店主に見せる剣。

「うわっ、かなり劣化が進んでいるな。何をしたらそんなになるんだ？」

店主の問いかけに少しながら戸惑い苦笑するルイ。

「僕、実は賢者なんですよ。魔法剣でこうなりました。だから魔法剣に耐えられる剣が欲しい」

一瞬、驚愕な表情を浮かべる店主。

「賢者？ あの、『万能の聖者』と呼ばれているあれか」

「うん」

「難しい注文だな。でも、無い訳じゃない。ちょっと待ってな」

そう言つて、カウンターに並べてある武器とは別の物を取り出した。そして、その物を見て呆氣に取られるルイ。

「おじさん僕に武器を売る気無い？」

店主が取り出した物、それは剣の柄である。

「まあ、落ち着けよ。こいつは、サイコソードって言つ武器だ」

「サイコソード？」

聞き慣れない武器。おそらくあまり流布されていないのだろう。手に取るルイ。

「な、何これ」

「はは、驚いたろ」

柄が、異様に重いのだ。ルイが今使用している剣と同じかそれ以上だ。

「その柄は、魔力を力に変えるのさ。魔法を使う容量で刀身をイメージしてみな」

なにやら難しい事を言う店主。

目を閉じるルイ。静寂が辺りを包む。徐々にイメージされるオリジナルの刀身。すると、鐔の先からうっすらと剣の形を成した白い半透明な物が現れた。大きさは、すでに大剣の域に達している。

触つてみると、ちゃんとそこに何らかの物体がある。しかも、不

思議な事に、こんな大きな剣が出現したにもかかわらず、重さは柄を持ったときとまったく変わらないのだ。

「それが、サイコソードさ。柄が重いのは、攻撃を重くする為さ。魔力は重さを持たないからな」

「へえ」

ルイはそう言って剣を消した。

「切れ味のほうは？」

「まあ、人によって色、形や切れ味はバラバラさ。言っただろう。

この剣は君の思い描く剣を忠実に具現化するんだ。君の描いた剣はそんなにナマクラなのか？」

「なるほど、気に入った。いくら？」

「そうだな。三万ギグスでどうだい？」

「だって、お師匠様。良いですか？」

「別に構わないですよ。お金ならまだありますから」

そう言ってエリアルは袋の中の金貨を出した。

「じゃあ次は俺達っすね。おじさん、この店には、魔法玉は置いてある？」

「ああ、あるよ。ちょっと待ってな」

「ごそごそとカウンターを探す店主。」

「あつた。これだろ？」

カウンターに置かれる宝玉。玉の中心には六芒星がくつきりと映し出されている。

「おお、これこれ！ 人数分ある？」

レンが聞くと店主は短く「あるよ」と言って三つ宝玉を足した。目の前に置かれた魔法玉が、ほくほくするレンの顔を映し出す。

「ねえ、レン。何それ」

「ああ、これ？ これは魔法玉って言っただけで魔力を増幅させる宝石だよ。魔力の弱い人間でも魔法を使うことが出来る。当然、俺達の魔法も強化されるって訳だ」

「あらまあ、便利な道具」

驚きを見せるクリス。

「おじさん。これを装飾品かなんかに出来るっすか？」

「当たり前だ。ここは道具屋だぞ。何でも材料はそろってるよ」

「それだったら私はこの剣にはめ込んで欲しいな」

クリスはそう言っただけで先ほど購入した剣をカウンターに置いた。

「僕は、ブレスレットがいいな」

「私も」

「だそうっす。俺はペンダントにでもしといてください」

苦笑しながら告げるレン。

「あいよ。じゃあ明日にでも取りに着てくれ。魔法玉の御代はその時だ」

「了解。さあ、今日はゆっくり休もう。俺は、もう疲れた」

こうして四人は無双亭へと足を進めるのだった。

翌朝。

四人は昨日の道具屋に居た。

「おっさん。昨日、頼んだのできてる？」

「ああ、出来てるよ」

店主はカウンターから銀色に光るブレスレットとペンダント、そしてクリスの剣を取り出す。光沢を放つ装飾品。そして柄の部分に銀で添えられた魔法玉。全てが見事な出来栄だった。

「いくらですか？」

「そうだねえ。二万ギグスでいいよ」

「分かりました」

エリアルはそう言って袋の中から数枚の金貨を取り出した。

「まいど」

店主はそう言って一礼をする。

四人は少し笑みを作りそれぞれの装備を取った。

クリスは腰に剣を、ルイとエリアルは左手にブレスレットを、レンはペンダントを首に。

各々の強化された装備品。

「これで少しはマシになるかな？」

「さあ、少なくとも楽にはなると思いますよ」

含み笑いを浮かべるエリアル。

「これで通用しなかったら詐欺でしょ。あの洞窟自体が
みなぎる自信。」

「だったら、力試ししてみないっすか？ 闘技場で」
不意に開かれたレンの口。

「でたな、遊び人本領発揮」

ジト眼のクリス。だが、口は笑っている。それほど嫌がっては居ないようだ。

「僕も別に構わないかな？」

頭の後ろで手を組むルイ、軽く伸びをしているようだ。

「私は、反対です。怪我でもしたらどうするんですか？」
「大丈夫だって。エリアルさん」

ぶつくさ言うエアリアルの背中を押すクリス。
こうして四人の足は闘技場へと向けられた。

「本当にやるんですか？」
「当たり前でしょ。それにモンスターも前のチャレンジャーが全部

片付けちゃったんだから。後は私達しかいないもん」

悪戯気に笑みを作るクリスと渋面のエリアル。その言葉は、まるで狙っていたかのようにだった。

「あまり気が進まないです。仲間同士で対決するなんておかしいですよ。しかもペア戦でしょ。貴方達、私達に勝つつもりなんですか？」

「もちろん。それに組み手は、お互いの悪い所を見つけるいい稽古だと思わない？」

「そうですか？」

首を傾げるエリアル。何でこうなってしまったのだろう。自分はただモンスターと戦いたかっただけなのに。

「私達みたいなレベルの魔術士はこの世でそう何人も居るもんじゃない。ましてや、宮廷に選ばれたもの同士の対決なんて絶対と言うぐらいない。今日ここに居る観客達はツイてるね」

「私は、昨日買った魔法玉の性能を確かめたかったんですけど……」

寂しそうに手に持っている杖を見つめるエリアル。

「僕ですよ。まさか、武器が使えないなんて」

同時にルイも似た仕草をした。

闘技場での対人戦は、刃物の使用を禁止されている。剣士は木刀で、魔法使いは魔力制御装置をつける事になっている。レンチムと戦う事になっているエリアルは、魔法玉、ルイの装備のサイコソードと魔法玉は使う事が出来ない。当然レンも同じ条件だ。その代

わりと言つては何だが、ルイの腰には櫛の木で作られた木刀と、右腕には魔法制御装置となる青い宝玉がはめ込まれたブレスレットが付けられていた。当然エリアルも櫛でできた杖を持ちブレスレットが付けられてた。

「はあ、こうなった以上やるしかないですね」

嘆息混じりのエアリアル的心境などお構い無しに司会はどんどん事を運んでいる。

「さあ、次は本日のメインカード、ルイ・ヒルダス、エリアル・ルシファレス対レン・クロイツ、クリストファー・シルフィードの対決だ〜！」

闘技場に響くマークの声。

「さあ、司会者もお呼びだよ」

開く門。そして背中を押されるエリアル。会場に足を踏み入れると耳を劈くほどの大歓声か四人を向かい入れた。

「はあ、怪我が無ければいいのですが」

舞台中央でエリアルが肩を落とす。

「もう、心配性だな〜、エリアルさんは」

クリスは深い溜め息を吐く。

「そっか、エリアルさん。もう、おばさんだもんね」

衝撃的な一言。偶然その言葉を拾ったマークのマイクがクリスの声を増幅させ会場全体に響かせた。

おばさん。オバサン。オヴァサン。

同時にそれはエリアル頭の頭の中にも木霊した。

「いやあああああああ！ おばさんは、まだ、いやあああああ
！」

滝の様な涙を流しながら首を振り髪を振り乱すエリアル。

「お、お師匠様落ち着いて！」

「だって、ルイ君は事実上、年取らないし。私達まだ十代だし」

とどめの一言だった。冷や汗を流すルイとレン。何かがまずい。いや、もはや『まずい』のレベルを超えている。ルイとレンは死を覚悟した。ルイに限っては一度死んでいる身でありながら再びである。

「この小娘が！ よっぼど死にたいらしいね！」

「出来るもんならやってもらおうじゃないか！ これでも、宮廷魔術士の看板背負ってんだ！」

「上等！」

もはや、口調が別人のエリアル。完全にキレたらしい。今ここに、新旧の宮廷魔術士の争いが勃発した。

殺気立つ二人。そして、ぶわっ涙を流すルイとレン。

「まあ、準備も出来たみたいだし……」

「まだ出来てない！」

ルイの悲痛の叫びがマークに向けられるがそれはあっさりと流された。客からしてみればこれ以上にならない面白い見世物なのだから。

「さあ、どんな風に死にたい？ 好きなように逝かせてあげる」

殺気の籠ったエリアルルの眼。

「はわわわわ」

全力で逃げ出そうとするレン。だがあっさりとクリスに首根っこを掴まれた。流石、光魔術と剣術を極めただけの事はある。素早い動きを見せるクリス。

「後で死にそうになるぐらいしばかれるのと今死ぬ気で戦うの、どっちがいい？」

「今戦わせていただきます」

レンに、もはや逃げ道はない。

「お師匠様、頑張つて〜！」

一方、ルイの方は傍観者になりきって事を乗り切ろうと言う魂胆だ。

「貴方もです！ 相手は腐っても宮廷魔術士です！ 全力で行きなさい！ じゃないと……」

エリアルルの持っていた杖はルイに向けられた。

「精神、燃え尽きるまで全力で行かせていただきます」

木刀を構えるルイ。

「では、始めてもらおうよ！ いざ尋常に……始め！」

闘技場に響くマークの声。戦いの幕は切って下ろされた。

「さあ、援護を頼むよ！ レン」

返答も聞かずに飛び出すクリス。疾風のように闘技場を駆ける。

「ルイ。応戦です。殺す気で行きなさい」

「それはちよつと……」

困惑するルイ。

「いいから行きなさい！」

ルイの背中に蹴りを入れるエリアル。その表情は鬼神の如く凄まじい物があった。

「もらった！」

更に追い討ちをかける様に声が聞こえた。いつの間にか目に前に居たクリスは木刀を振り下ろしていた。

——ガッ！

乾いた音が会場に響く。ルイが木刀を横に構え、クリスの太刀を遮ったのだ。

「危ないなあ。もうちょっと反応が遅かったらやばかったよ」

ようやく、戦闘モードに切り替えたのか口調が変わったルイ。そして、鐔迫り合いに持ち込む。

「ちえ、ルイ君さえしとめられれば、あんなおばちゃん怖くないのに」

舌打ちするクリス。

「こらこら、これ以上お師匠様を怒らせないでくれ」

苦笑するルイ。

「嫌だよ。だって面白いんだもん！」

「それが本音か」

溜め息をつくるルイ。だが、一向に力は緩まない。ガチガチと音を立てた鐔迫り合いが続く。

一方、取り残されたエリアルとレンは、激しい攻防を繰り広げてきた。

「金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！」

「聖なる光に包まれし獅子よ。その威光を蒼い冷気に変えて、我の

前に鉄壁の壁を成せ」

レンは、熱光線で攻撃を仕掛ける。だがエリアルは、その攻撃を氷の壁を張り、いとも容易く相殺させた。

お互い魔力制御装置を付けているにもかかわらず凄い威力だ。

「どうしました？ 貴方の力はそんな物ですか？ これでは退屈しのぎにもなりませんよ」

挑発するエリアル。

「言ってくれますね、エリアル先輩。でも、俺も伊達に宮廷魔術士の看板を背負ってる訳じゃないんですよ」

そう言うレンは両手をエリアルに掲げた。そして、

「暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの雷！」

詠唱を唱えるレン。だが、それだけでは終わらなかった。

「金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！」

再び、別の魔法を使ったのである。

二重魔法だ。二重魔法とは、二段魔法を応用し、発展させたものであり、同時に二つの魔法を使う事で殺傷力を高めた高等魔術である。

「へえ、さすがは宮廷魔術士ですね。その技が使えるんですか」

感心するエリアル。

「えへ、凄いでしょ」

レンの両手に魔力がたまっていく。

「ええ、凄いと思います。では、その技の弱点を教えてあげましょう」

エリアルはにっこりと笑い、持っていた杖をレンに向けて投げた。

「うわっ！」

顔面で杖を受け止めるレン。今まで構築した、魔力は一瞬にして霧散した。

「二重魔法の欠点は魔法が発動するまでのラグタイムなんですよ。戦場にそれだけの時間が許されていますか？」

答えは否だ。モンスターとてバカではないのだ。

「いたたたた。参項になるっす」

顔を押さえて立ち上がるレン。だが、その顔は自信に満ちていた。

「やっぱり、長丁場は不利になるっす。そろそろ、決めさせてもらいますよ」

レンは不適に笑った。

「クリス！ そろそろ決めるぞ！」

「おう！」

高く飛び上がるレンとクリス。そして、詠唱。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！」

レンの風の魔法。二人の身体は風に包まれ更に高度を上げる。舞台に居るルイ達がまるで豆のようだ。

「覚悟してください！ 紅の十二翼を持つ竜王^{バハムート}よ。汝、爆炎に姿を変え我と共にあらん事を。我は願う、紅蓮の十二翼！」

聞いた事の無い詠唱。刹那、レンの両手から十二本の紅い閃光が発せられた。鮮やかに弧を描く紅蓮の光。

「躲せるもんなら躲してみろっす！」

紅い軌跡はレンの声に反応するように破裂して行き爆炎に姿を変える。

舞台を包み込む爆炎。そして、炸裂する炎。闘技場は劫火の炎に包まれた。一応加減はした物の、これで倒れなかったら詐欺である。静まりかえる闘技場。あまりの凄さに観客は、呆氣にとられていたのだ。二人で、空中に浮いた理由。それは、クリスを巻き込まないためだったのだ。

「へへっ、これで倒れなかったら詐欺です。これならさすがのルイ

先輩達でも――」

「躲せちゃうんだな、これが」

地上から聞こえるルイの声。粉塵を巻き上げ炎の渦が空へと消えて行く。

ゆっくりと姿を現すルイとエリアル。かすり傷すら負っていない。

「……詐欺だ」

頭を抱えながら呟くレン。

「まったく。人を殺す気ですか？ 普通の人間だったらやばいですよ。今のは」

ぼやくエリアル。普通じゃないだろというクリスの突っ込みはあえて無視をした。

「絶対障壁っすか」

「当たり前だろ！ 賢者の特権だよ！ 広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！」

自分の身体に風を纏うルイ。そして静かにつぶやく。

「お師匠様。すぐに戻ってきますから」

「ええ、行って来なさい」

エリアルの返答を聞くと、ルイは静かに呟いた。

「風よ、私の思うがままに……」

穏やかな風が闘技場に吹く。そして、その風に身体を任せるルイ。

「今度は、僕等の番だ」

突如、風は強くなり、ルイの身体はレンに向かって猛烈なスピードで進んでいく。

「いい加減、遊びは終わりにしてもらおうよ」

瞬時に間合いを詰めたルイ。透かさず撓る様な蹴りを繰り出し、レンに連打を与える。

「うおおおお！」

最後にルイの回し蹴りがレンの延髄を捕らえた。渾身の一撃、確かな手ごたえが伝わる。

「がはっ！」

やはり肉弾戦ではレンに勝ち目は無いのだろう。風の制御を失いゆっくりと落ちていくレンの身体。レンの魔法で浮いていたクリスの身体も共に落ちていく。勝ちを確信するルイ。

落下していくレンの身体。どうやら意識は無いようだ。

目標が完全に動かなくなった事を確認したルイ。次に、ルイはクリスに標的を移した。風を操りクリスの身体を中に浮かせる。

そして、

「さあ、どうする？ これで君は一人だけになった。降参するなら今のうちだ」

「誰が降参なんて……」

と言いかけた瞬間、クリスの鼻先数センチを氷の刃が走った。

「チッ、外したか」

とエリアル。

「こ、こここ、こ、降参します！」

手をあげるクリス。軍配は上がった。

「勝者！ ルイ・ヒルダス、エリアル・ルシファレス！」

こうして、闘技場は大歓声に包まれたのだった。

「ねえ。もう機嫌直してよ」

仏頂面のレンに頭を下げるルイ。辺りはもう暗い、四人のあの試合から何時間立ったのだろう。すっかり夜になっている。レンは、さっき目が覚めたばかりなのだ。

「酷いっす。クリスだけ助けてさ……」

「そんな事言っただって気を失ったんだからしょうがないじゃないか」
「それは、そうだけど……僕は納得いかないな」

レンは左手に巻かれた包帯を見て切なげな顔をした。既にクリスが魔法で治している為痛みはない。

「でも、凄かったじゃないですか、あんな魔法使えるなんて思っていないませんでしたよ」

「そうそう。あのいけぞんざいな魔法。あんなの良く考えたと思うよ。お前あんなの洞窟では全然使ってなかったじゃないか」

紅蓮の十二翼と名づけられた魔法はレンのオリジナルの魔法だ。

紅い十二本の翼を持つと言われる竜王に見立て十二本のを放つ荒々しい魔法である。そもそもオリジナルで魔法を作るという作業はよほど精霊に愛されていないと作る事が出来ない。魔法の構成イメージを一から作り上げ、オリジナルのカオスコードを精霊と一緒に共同で作り上げていくのだ。そして、レンはそれらの事を平然とこなしているのだ。それを考慮しただけでも凄まじい才能である。

「そりやそうでしょ。洞窟なんだから、あんな魔法撃ったら洞窟が崩れちゃいますよ。それに、なんだかんだ言ってしっかり躲してたじゃないですか!」

更にレンの逆鱗にふれたらしい。

「当たり前だよ! 躲さなかったら僕はともかくお師匠様が危ないだろ」

「そうですよ。私もあそこで木っ端微塵になって死にたくは無かったです」

「なあ。いい加減、機嫌直してよ」

「じゃあ、今日の賞金で夕飯奢ってくれたら許します」

「うん。好きな物、頼んでいいよ」

「じゃあ、私ドラゴンのステーキ」

「ああ、好きにして」

溜め息を吐くルイ。

こうして、四人の腕比べは幕を閉じた。

ルイ達のはしゃぐほぼ同時刻。

漆黒の闇の中、蠢く人影がゲートの街を走る。その足取りはキラベルの洞窟へと向けられていた。

男だ。右手には自分と同じぐらいの長剣を持っている。

「待っているよ、レグナの眼よ。そしてこの俺が必ず覚醒させてやる」

月光に照らされ怪しく光る長剣。そして男の影は月夜に消えた。

第五話 リク・カミィラ

「……いいにおい」

部屋に漂う焼きたてのパンの匂い。

「どうですか？ 今日厨房を借りて久しぶりにパンを焼いてみたんですよ」

そう言ってエリアルは椅子に腰掛けた。焼きたてのおいしそうなパン。そして付け合せとして置いてあるスクランブルエッグとコーヒ―。

「毎日、ここの食事って言うのも飽きてしましますしね」

ニコツと笑うエリアル。それとは、正反対にポカンと口を半開きにした二人。クリスとレンだ。

「どうしたんですか？ 二人とも」

呆けている二人に問い掛けるルイ。

「エリアルさん。料理できるの？」

「ええ。私は、ずっとこの子を養ってきたんですよ。少しぐらいなら出来ますよ」

意外な一面を見る二人。

「じゃあ、食べ始めますか」

「はい」

四人は少し遅めの朝食をとり始めた。

「あ、よかった。いい感じに焼けてる」

エリアルは自分の焼いたパンを千切り口に入れた。

「おいしい！　もしかしたらここのシェフより料理上手だよ」

同じようにパンを口に放り込んだクリスが感嘆の声を上げた。

「本当においしいです。ルイ先輩、毎回こんな上手いもん食ってたんですか。うちのクリスの作ったものなんてまったく」

「まったく何かな？」

スクランブルエッグに添えてあったフォークがレンの喉元に添えられる。さすが剣士ともいえる身のこなし様である。

「はわわわわっ。クリスさんのお料理もとってもおいしゅうございます」

滝の様な涙を流すレン。

それを見て笑うエリアルとルイ。

「そうそう、僕がお師匠様に弟子入りした時の食事もこのメニューでしたよね」

「あの時はこれしか作れなかったんです！」

エリアルは真っ赤になって応えた。

「世界一の奇術師の弱点は、実は料理だった……なんてね。ってあれ？」

首を振るクリスとレン。

「何やってるんだ、二人とも。ってお師匠様!？」
「……」

眼の座ったエリアル。聞き取れるか聞き取れないかの小さな声で言う詠唱。

「我は願う。劫火の炎!」

「なっ、お師匠様ああああ!」

無論、この後ルイが黒焦げになったのは言うまでも無い。

「ふええええ。痛いよ、熱いよ」

半泣きで訴えるルイ。

「はいはい! まったくもう!」

そう言っただけでエリアルは、魔法で作った氷をルイに当てた。上半身に軽いやけどを負ったルイは、当然のごとくベットに横たわっている。

「大体、あなた賢者でしょ。あの程度の魔法は受け止められるでしょ」

「だって、お師匠様ゼロ距離で魔法撃った」

しばしの沈黙。

「ほ、ほら。もう大丈夫でしょ。自分に回復魔法をかけないと痕になりますよ」

「あ、ごまかした」

とは言いつつも、しっかり光の力を開放しているルイ。いつかどこかで見た光景とまるっきり同じだった。

「穏やかな光者よ、悠久の光を我に！ 血よ肉よ、我の傷を塞げ！」

詠唱が終わると何か暖かい物に包まれた感じがした。引いていく痛み。

「まったく。朝から何をやってるんでしょうね、私達は」

嘆息混じりにつぶやくエリアル。

朝からどつと疲れたと言った感じだった。

「エリアルさんってルイ君には容赦ないのね」

「俺もそう思う」

二人は、ぐったりと嘆息した。この二人が抱いていたイメージと言うのは『優しい面倒見のいいお姉さん』と言うイメージだったが『怒ると何をするか判らないお姉さん』に定着していた。

「偽善者なんですよ。お師匠様は——ぎゃあああ！」

部屋に木霊する悲鳴。

この後、再びルイが黒焦げになったのは言うまでもない。

三人がこの洞窟で出会い、すでに七日が経とうとしている。全てに万能なエリアルとルイは戦う感を取り戻し、魔法しか使えなかったレンは少しずつ体術を。そして、攻撃魔法の使えないクリスは更に剣に鋭さを増していた。劇的に進化を遂げた四人の戦闘能力。すでに、四人の手にかかればケルベロスでさえ弱い部類に入ってしまう。

そして、

「キユイ〜！」

遠くの方で聞こえる鳴き声。

「うん？」

「何だ？」

刹那、洞窟内が揺れる重苦しい声が洞くつに響く。まるで四人を試すように事は起きた。

暗澹の支配する洞窟。地下二階に足を踏み入れた四人は戦闘の物音を耳にする。激しい奇声が洞窟内に轟く。

「まさかとは思っけど」

「多分ガラムですね」

「誰か戦ってるのかな」

そう言うなりクリスは三人をおいて駆け出した。

「おい！ 一人で行くなつて！」

鬼火の照らす範囲から迷う事無く出て行くクリス。慌ててクリスの後を追う三人。

そして、三人が最初の曲がり角に付いた瞬間、奴は居た。

「うげっ！ 本当にガルムだよ」

ぼやくルイ。

そして、ガルムの足元には小さな、本当に小さな動物がいた。リスのような身体とオレンジ色の体毛。ザクロ石のような両目。そして、額にはやはり赤く光るルビーが付いていた。カーバンクルだ。どうやらガルムに襲われていたのはカーバンクルらしい。すでに力を使い果たしたのか、その身体は力なくぐったりとしていた。

「まずい、おい！ こっちだ！」

声をあげ、モンスター達をこちらに引き寄せるルイ。咄嗟の判断だった。ガルムはこちらに気がついたらしく足をこちらに向けた。

「行くよ、レン！」

「はい！」

鞘から剣を引き抜くルイ。一瞬後、疾風に如くガルムに斬りかかった。蒼い閃光が走り、ガルムの首を落とした。時間稼ぎには十分な攻撃だ。

「クリス、カーバンクルに回復魔法を！ お師匠様もクリスの援護をお願いします」

「回復魔法ってこの子モンスターだよ」

「いいからかける！」

「判ったよ、ルイ君は人使いが荒いんだから」

そう言いながらカーバンクル保護に向かうクリスとエリアル。

素早くカーバンクルを抱き上げガラムとの距離をあけるクリス。

「穏やかな光者よ、生命の源を我に授けたまえ」

詠唱が終わると同時に軟らかな光がカーバンクルを包む。

「これでいいんだよね」

クリスの手の中で震えているカーバンクル。だが、その傷はすっかり治っていた。

「おつけ。レン！ 僕が斬り込んだ後に魔法だ！」

「了解！」

詠唱を始めるルイ。

「絶大なる炎よ。紅き帝王よ！ 我と共に敵を討て！ 炎よ！ 我と一つになれ」

左手につけている魔法玉が鋭く光る。蒼白い刀身は、紅く色を変えた。魔法剣だ。ルイが、装備を変えて劇的に進化した魔法剣。紅く光った刀身。その刀身からは、炎は一切出ていない。以前の魔法剣ではありえなかった現象である。魔法玉で増幅された魔法と、刀

身が魔力で出来たサイコソード。この二つが組み合わさる事で刀身と魔法が一体化するのだ。

「弾けるおおおお！」

紅いの閃光が再生をしているガルムの身体を縦に裂く。そして、即座にバックステップ。ルイはガルムとの距離を開けた。刹那、切り口を中心に爆発した。

「レン！ 合わせろ！」

「はい！」

『絶大なる炎よ。赤き帝王よ！ その姿を爆炎に変え、我に力を与えよ！』

重なる二人の声。クリスは剣を掲げルイは両手を前に突き出す。その直後二本の火柱がガルムに向けて放たれた。業火に包み込まれるガルムは、身動き一つせずその場に倒れ伏せた。だが、まだその姿を宝石に変えていない。

「しつこいんだよ！」

再生を繰り返すガルムに毒づくルイ。

『金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！』

とどめと言わんばかりに詠唱を終えるルイ。

「吹き飛ばっ！」

熱光線が燃えているガルドを打ち抜く。響き渡る轟音。ようやくガルドはその姿を宝石に変えた。

「よし！」

剣を消し鞘に収める二人。以前に比べれば会心の勝利だ。

「やったね、ルイ君」

カーバンクルを抱きかかえたクリスが二人に駆け寄る。クリスの言葉に親指を立てて余裕を見せるルイ。あれほど苦戦したガルドを倒すこの装備。やはりかなりの物なのだろう。

「ほら、もう大丈夫だよ」

「キユイ」

抱きかかえた腕からはカーバンクルが顔を除かせていた。

「うわゝ。私、純モンスターなんて初めて見ました」

「僕もだ」

純モンスターとは、この世界に本来から居たと言われるモンスターである。いつの頃から宝石モンスターが溢れ出したこの世界では純モンスターの数は極端に減少したのだ。

「おいで」

屈託のない笑顔を浮かべ手を差し出すルイ。

「キュイ〜」

クリスの手からルイの手へ移り渡るカーバンクル。結構人なつこい様だ。

そして、そのままルイの頭の上まで登るカーバンクル。

「うわっ！ あいたたた！ 引っ張るなっ」

どうやらカーバンクルが気に入ったのはルイのお下げ髪の様だ。

「キュイ、キュイ〜」

「おわっ！ あゝあ。ほどけちゃった」

結つてある部分がほどけ散らばる髪。カーバンクルは満足そうにルイの頭に座り込んだ。

「あはははは！」

声を揃えて笑うクリスとレン。

「何？ 何で笑ってるのかな」

「いや、悪い。笑うつもりは無いんだけどルイ君が髪の毛のほどけたら女の子だよ。……だっはっはっは」

ルイは抗弁しようとして——そして、やめた。と言うよりツボに入ってしまったこの二人を止めるのはまず無理だろう。諦めてカーバンクルと戯れるルイ。

「しかし、そのカーバンクル本当に人なつこいね」

クリスが手を伸ばす。だが、

「いたたたたた！」

指をかまれるクリス。慌ててその手を引っ込めた。

「嫌われてるみたいだな、クリス」

けらけらと笑うレン。

「おによれ、回復までしてあげたのに。さっきまで猫かぶってたな？」

「はは、手本を見せてやるよ。よく見てな」

レンはそう言ってカーバンクルに手を伸ばした。刹那、カーバンクルの目が怪しげに光る。

「ぎゃあああああ！」

もがくレン。顔面を引っ掻かれたのだ。

「もつと嫌われてるみたいだね。レン」

「むう」

「可愛いですね」

唸るレンを尻目にエリアルの声が洞窟に響く。
エリアルの手の中でちょこんと座るカーバンクル。

「何故だ」

同時に呟くクリスとレン。

「あはっ、可愛い」

頭を撫でるエリアル。カーバンクルは嬉しそうに声で鳴いた。

「こいつ、俺等にはなつかないくせに」

プルプルと拳を振るわせるレン。

「まあまあ。落ち着いて」

慌てて止めに入るクリス。

「あゝあ。それにしても、こんなになつかれちゃって。どうするんですか、このカーバンクル」

嘆息するレン。

「飼いましょう」

短く応えるエリアル。

「キユイ」

エアリアルの手の上で嬉しそうに鳴くカーバンクル。そして素早くルイの肩の上に飛び移った。

「俺達に飼える訳ないっすよ。自然にかえした方がこいつの為っす」
「グウウウウ」

今度は威嚇するように鳴いている。どうやら人間の言葉が理解できらしい。

「一緒についてくるかい？」

カーバンクルの頭を撫でるルイ。

「キュイ〜！」

再び嬉しそうに鳴くカーバンクル。

「だってさ、レン」

「むう〜」

諦めた様に唸るレン。

「分かったっす」

頷くレン。だがこの答えの裏には実はひっかかれないと言った気持ちが込められていた。

その日の夜、

「この子に名前を付けてあげましょう」

無双亭の食堂でエリアルの声が響いた。

「別にカーバンクルはカーバンクルでいいんじゃないっすか？」
「グウウウウ」

昼間同様、威嚇されるレン。

「わかったよ、考えますよ」

そう言っただけでレンは滝の様な涙を流した。

「そうだな、キューイって鳴くカーバンクルだから……」

考え込むレン。

「レッド・ア太郎」

『何故』

真顔で返す三人。声までしっかりと揃っている。レンの意見はあっさりとして却下された。

「ぐおおおおおお！ 顔が！ 俺の顔が！」

顔を抑えもがくレン。その顔には再び引つかかれた痕があった。レッド・ア太郎は、カーバンクルにとっても拒否されたいらしい。苦笑しながらそれを見る三人。

「ルイ、何かいい名前ないんですか？ あなたに一番なっているんだからあなたが決めることだと思います」

「キユイ〜！」

その通りだと言いたげに鳴くカーバンクル。

「う〜ん、そうだな〜」

レン同様に考え込むルイ。数秒の間と沈黙。

「コロなんてどうかな」

恐る恐る言うルイ。カーバンクルがお気に召さなければ引つかかれる運命が待っている。

「コロ？」

「何か見た目がごろごろしてるからコロ」

『こいつもレンと同じレベルだったか』

ルイに振った事を激しく後悔するエリアルとクリス。そして、レンと同様引つ搔かれるのだと確信する。
だがしかし。

「キユイ〜」

身体全体で喜びを表す一匹と、静まり返る三人。

跳ねるカーバンクルと啞然とするエリアル。と言うよりも特徴だけで決めた名前にここまで喜んでいるのを見て驚愕しているのだ。

「ま、まあこの子がそういうのなら私はいと思いますよ」

「レッド・ア太郎よりはマシだね」

驚きを隠せないエリアルと腕組をするクリス。

「よし、決定。じゃあ、お前は今日からコロだ」

手を差し出すルイ。

カーバンクル改めコロは、小走りしてその手の上に乗った。こうして、ルイ御一行は三人と一匹になったのだった。

「はは、ははは、あははは」

乾いた笑い声が洞窟を支配する。ルイの声だ。

「レンさん。ルイが壊れた」

嘆息するエリアル。

「キユイ」

首を左右に振りながら肩をすくめるコロ。案外カーバンクルというモンスターは頭がいいみたいだ。人を小馬鹿にする事も出来るらしい。と言っても今の四人には怒る気にもなれないが。

「大丈夫だって、一階に比べれば全然狭かったじゃないっすか。新しい階段を見つけたぐらいで……見つけた、見つけちゃったんだよね」

「で、でも、この階段を下りたら最下層かもしれないですよ。そう

すれば私達の目的も……」

フォローするエリアル。だが、

「二階への階段を見つけた時も同じ事言ってたよね。エリアルさん」

と、突っ込みを入れるクリス

「うっ！」

痛い所を突かれるエリアル。

「はああああ、いつになったらこの洞窟は終わるんだろっ」

深い溜め息を吐くクリス。

「う、うううううう」

徐々に気落ちしていくエリアルとレン。四体合体、簡易ブラックホールの出来上がりである。

「キュイ〜！」

それを見かねたのか突如騒ぎ出すコロ。ルイの頭から軽やかに飛び降りた。

「どうした？　コロ」

「キュイ〜、キュ、キュイ〜！」

器用に後ろ足で立ち上がり、前足で階段を指すコロ。身振りで何

かを伝えようとしているみたいだ。

「凄いな。お前二足歩行できたのか」

くだらない事に感心するレン。刹那、洞窟に響くレンの悲鳴。コロがレンのすねを齧ったのだ。

「キュイ」

付いて来いと言わんばかりに階段を下りるコロ。

「あ！ 待て！ モンスターがいたら危ないぞ！」

ルイの静止も聞かずひたすら階段を下りるコロ。仕方なく三人は階段を下りていった。

そして、

「何だこは」

階段を下り切った直後、驚くべき視界が広がっていた。

まるで洞窟とは思えないような広い空間。そして、はるかかなたに見える空間の終わりと数々のモンスターの死骸。ここでは、なぜか宝石モンスターは宝石に姿を変えていなかった。

そして、やや遠くの方に見える人影。青年だ。レンと同じ様な中背中肉の男。そして右手には自分の身長と同じぐらいの長剣。格好から判断すると聖戦士だろうか。そして、その男には酷く見覚えがあった。

「……リク」

小さく呟くルイ。

「やっと見つけた。お師匠様！ リクです！」

この一年、ずっと追いかけていた者がついに目の前に現れたのだ。ルイが皆の方を向くのとほぼ同時だった。力強く地面を蹴るレン。一瞬にして、リクとの差を詰める。

「レン！」

呼び止めるがレンは止まる事無くリクとの距離を詰めた。そして放たれるレンの拳。

——ドゴッ

鈍い音。レンの拳がリクの顎を捕らえる。吹き飛ばされたリク。

「レン！ 何をしてるんだ！ クリス、止めに行くよ」

無言のクリス。それどころかクリスも剣を構えていた。

「……クリス」

殴り飛ばされたりク。唇から滴る紅い雫。殴られた衝撃で口を切ったのだろう。彼はゆっくりと立ち上がった。

「誰かと思えば、お前か。レン。本当に転生したのか？」

口を袖拭うリク。

殺伐とした雰囲気放っている。

「それに、お前達。……まだ生きていたのか」

リクは訝しげにルイを一瞥した。

「まあいい。貴様等ここに何しに来た。また、殺されたいのか？」

背中に背負う長剣を抜き取るリク。

「なんだと……」

ルイが向かおうとするがそれは叶わなかった。

「ぶっ殺す！」

ルイよりも速くレンが動いていたのだ。血相を変え、回し蹴りを放つレン。

だが、リクは全てを見切ったようにしゃがみ、軽々しくその蹴りを避けた。そして、立ち上がるのと同時にその長い長剣で逆袈裟に持ち込んだ。

「くっ！」

刀身に掌手を当て、軌跡を反らすレン。
弾いた右腕からは血が流れ出ていた。

「さっきまでの勢いはどうした」

嘲笑う様に剣を突きつけるリク。

「レンさん！」

「レン！」

「悪いっす。皆、手を出さないでください。これは俺とリクの勝負です」

静かに呟くレン。

「何言ってるんだよ！ 僕は……」

「判ってる！」

遮られるルイの言葉。

「判ってる。でも、俺もこいつに恨みがあるんですよ！」

「……レン」

戸惑うルイ。

「暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの力！」

手に紫電を纏わせるレン。

「貴様は俺に何をした。貴様はクリスに何をした！」

湧き上がる憎悪を背負い突きつけられた剣を払うレン。

そして、青年の腹部に走る電撃。レンが腹部に拳を突きつけたのだ。

激しく放電されるレンの拳。蒼白い光が辺りを包んだ。

「くっ！ 相変わらず凄い魔力だな。レン」

「氷壁か」

うつすらと腹部に張られた氷。それで電撃を防いだのだ。
とっさに後ろに跳び距離を置くレン。

「ほほう。強くなったな。それに頭を使うようになった。それは褒めてやる。だが俺の邪魔をするな！」

凄まじい咆哮と共に冷気が満ちる。

青年を中心に凍りつく地面。詠唱も無しに突如発動する魔法。よく考えてみれば先ほどの電撃を防いだ氷壁も詠唱を唱えていない。

「な、何が起こってるんだ」

初めて見る現象に戸惑うルイ。

「知っているか？ 俺は三百年前、ある人間にこんな技を教わったんだ」

薄っすらと笑うリク。

「まずい！ 逃げるよ！」

急速に集まる粒子の粒。そして、その粒子は氷柱へと姿を変えていく。そしてリクはその中心に居た。まるで自分が人柱になるとでも言うように。

「くっ！
オィバードライフ
限界突破か」

以前、エリアルに教わった事がある。魔法を幾重にも重ねて使う事で、魔力が増幅され臨界点を超える瞬間がある。その事を限界突

破と言う。そして、その魔力の引き起こす衝撃は計り知れない物がある。だが、そんな事をしてしまえば膨大な魔力に呑み込まれ肉体は消滅してしまう。

「……これが、限界突破だつて？」

あまりに唐突な出来事。呆然と立ち尽くすルイ。

「キユイ〜！」

コロの悲鳴。その悲鳴を聞いて正気に戻るルイ。

「逃げますよ。ルイ！ あれがもし、限界突破だつたら私達は助かりません！」

手を引かれる様にして階段を駆け上るルイ。

刹那、後方から吹き荒れる冷気を帯びた疾風。魔法の発動を意味していた。

階段を上りきった直後、揺れる洞窟。ぱらぱらと岩の破片が落ちてきている。

ある程度敵と戦い、洞窟の空気が振動すると言うことは多々あったが洞窟自体が振動するのは初めてである。次第に大きくなり、数秒後の後、ようやくその揺れは収まった。

「何て奴だ」

毒づくクリス。

「ちくしょう。俺は、またあいつに勝てなかったのか」

レンの拳が力なく岩壁を叩いた。零れ落ちる涙。

「……レン」

「俺は、また」

洞窟にはレンの嗚咽がいつまでも響いていた。

第六話 精霊

「……ルイ先輩。今日の事、聞かないんですか？」

不意に開かれた口。あれから、ずっと口を開かなかったレン。そして、それはクリスも同様だった。ようやく発せられた言葉。だが、いつもの様な明るい口調ではない。何か思いつめているようなそんな感じがした。

「別に、レンが言いたくなければ僕は自分からは聞かない」

ルイはそう言って手拭いを頭に巻いた。

「ふい〜」

心底気持ちよさそうな声を出すルイ。

「キユイ〜」

無双亭の名物となっている温泉に浸かりながらルイとコロは呟いた。効用は、打ち身、捻挫、骨折、きり傷、保温効果による冷え性の防止、に効く……かも知れないと書いてある。まあ、そんな事はどうでもいい事なのだが。すっかり、糸目になったルイとコロ。コロも桶にお湯を張ってもらいプチ露天風呂を堪能中なのだ。そして、その横に何かを考えながらも湯船に浸かるレン。

「……」

そして一瞬後、何かを吹っ切った様にレンは口を開く。

「ルイ先輩、邪神記は知っていますよね」

「そりゃ、有名だからね」

「そうか……。少し長くなるけどいいですか？」

その問い掛けにルイは首を縦に振った。

「信じる信じないは先輩に任せます。これを話せば信じてもらうのは難しいですから。まあ、信憑性を強める為です、まずはこれを見てください」

レンはゆっくりと右手を挙げ人差し指を立てた。刹那、指を中心に炎が纏わりついた。

「突発魔法って知ってます？」

問い掛けるレン。ルイは素直に首を横に振った。

「カオスワードの詠唱も無しに魔法を使う力。それが突発魔法です。そして、それは精霊に魅入られた者が、精霊しか使う事が出来ないと言われているっす」

レンはそう言って右手を強く握り拳を作った。煌々と燃える炎は、人差し指から拳全体に広がっている。

「あいつは、……リクは、氷の精霊なんですよ」

「え？」

一瞬言っている意味が判らず問い返してしまうルイ。

「そして、俺は炎の精霊です」

衝撃が走った。驚愕の表情を浮かべるルイ。

「信じられないっすか？ でも、クリスの正体はもつと凄いですよ」

硬直するルイを一瞥して再び口を開く。

「大聖女、ハーネ・ライコス」

「そんな、嘘だろ」

だがレンは真剣な眼差しをしていた。嘘をついているようには見えない。

「まさか、そんな事あるはずが……」

「それができるんです。転生の儀と言う神術でね。転生の儀を受けたものは前世の記憶と共に生まれ変わる」

レンがそう言うとは炎は弾け、そして消えた。

「そして、これから話す事は俺が持つ前世の記憶です」

レンはそう言って両眼を閉じた。そしてゆっくりと口を開く。

「今、伝えられている邪神記、あれは一部脚色されているんです。ハーネは自分の命と引き換えにレグナを倒したって事になってるけど、本当はレグナを倒したあの瞬間はまだ生きていたんです」

「じゃあ何で……」

「リクに殺されたんです。そして、俺も。今まで、ずっと信じてきた仲間が裏切ったんです。リクはカオス・ルークに転生させてもら

う変わりに奴らに魂を売ったんだ」

力なく呟くレン。

「だけど、クリス……いや、ハーネは自分が死ぬ間際に自分と俺に転生の儀を行なったんです。リクが転生をする時代に合わせて。そして、俺とハーネは肉体を持った。ハーネは昔のままの姿で、俺はこの赤い髪と赤い眼を持って」

言葉が出なかった。自分もリクに殺されたが、まさか精霊を相手にしていたとは夢にも思わない事だった。

「そして、俺達がこの時代に生まれた理由。判りますね？」

「リクの転生か」

「そうです」

レンは静かに呟いた。

「はは、未練がましいでしょ。リクを追いかける為にわざわざ転生までして……でもね、本当に許せないんですよ」

力なく笑うレン。

「分かるよ、レン。忘れたのかい？ 僕だってあいつに殺されたんだよ。今だってこうして不死人になってリクを探す旅にでている。僕だって未練たらたらなんだよ」

ルイは、にっこりと笑う。

「ルイ先輩。信じてくれるんですか？」

「まあね。僕は頭やわらかい方だから」

「ありがとうございます。ルイ先輩」

頭を下げるレン。

「礼なんていいさ。それよりちょっとだけ聞きたい事が幾つかあるんだけどいいかな」

「はい、なんすか？」

「まず一つ、偶然にしては僕達の出会いは出来すぎてないかな」

「まあ、そうでしょうね。俺等が仕組んだんだから」

「へ？」

硬直するルイ。

「仕組んだ？ 何処で！ 何を！ どうやって！」

「お、落ち着いて。ルイ先輩！」

血相を変えるルイとそれをなだめるレン。

「宮廷魔術士になった時にお二人の事を聞いたんです。今も剣を探しているよね。同じ目的を持つんだったらもしかしたら手を貸してくれるんじゃないかと思ってね、だから仲間にしたんです」

確かにそれなら納得が行く。

「じゃあ次。レグナの眼とはなんだ」

「何故それを聞くんです？」

「簡単だよ。もし、キラベルの洞窟でレン達に逢っただけだというなら偶然で押し通す事ができる。でも、僕等はあそこでリクに逢った。つまりリクもレグナの眼を狙っているって事だ。まさかこのま

ま黙っているつもりじゃないだろう？ 僕にこの話を切り出したんだ。もう僕は充分に聞く権利がある」

その言葉を発した途端レンの顔つきが変わった。

「……カオスアイテムかな？」

「カオスアイテム？」

「ええ、この世を滅ぼすかもしれないぐらいのね」

その言葉を聞いた瞬間、ルイの表情が変わる。

「ちょっと待ってくれ。そんなの一言も聞いてないよ」

「世間的にあまり流布されていない情報ですから」

「もし、リクに先を越された場合は？」

「最悪の場合、レグナの復活です」

レンは小さく呟いた。

「——また邪神記が」

「そうです」

「……」

「……」

無言になる二人。沈黙が辺りを占める。

「うん？ ちょっと待って」

「はい？」

「何で、リクはこの時代を選んだんだ？ 普通に考えてもっと早くに転生できるんじゃないか？」

問い掛けるルイ。

「それも、ちゃんとした理由があります。レグナはハーネに倒されて、その魔力を霧散させてしまったんです。だから、その魔力を蓄える時間が必要だったんです」

「それが、この時代だったんだね」

「はい」

レンの言葉にルイは頭を抱えた。

「だから、絶対に僕達はリクを倒さなくちゃいけない」

「そうか……」

再び二人の間に沈黙が訪れる。

だが、その沈黙は意外な形で終焉を迎えた。

「キユイ……」

コロだ。すっかりのぼせたのか、コロが力なく鳴いた。

「おっと、そろそろ上りますか。これ以上浸かっているとこのぼせそうっす」

コロを桶から救い上げるレン。その口調はいつもの口調に戻っていた。

「邪神記か……」

小さな声で本当に聞き取れないような小さな声で呟くルイ。

「どうしたんですか？」

脱衣所から聞こえるレンの声。

「ああ。なんでもない」

ルイはそう言って考えるのをやめた。

こうして、二人と一匹の長い入浴は幕を閉じたのだった。

無双亭の食堂は相変わらず客が居ない。まあ、宿を利用するのは旅商人が冒険者ぐらいである。そのため、何日も滞在する固定客を対象としているのだ。だから、人が居ないのは当たり前といえたり前なのだ。

「お師匠様。さっき、レンからリクの話をしました」

ホコホコと体全体から湯気を出すルイとレン。それと、コロ。

「レンの秘密。クリスの秘密。そして、リクの秘密も」

「ええ、私も聞いて驚きました。転生の儀なかなか興味のある魔術です」

話の着目点が激しくずれているような気がするがそれは気にしないで置こう。

「二人を利用のは悪いと思ってる」

クリスが口を開く。

「でも、レグナを復活させる訳には行かないんだよ」

俯くクリス。だが、そんなクリスを見てルイは口を開いた。

「別に、利用されたなんて思っていないさ。僕の目的は変わっていないからね」

「そうですよ。私達だって彼に恨みがあるんです。相方が殺された時点でもう私達の目的はリクに絞られてましたから」

エリアルはそう言って笑った。

「ありがとう……」

クリスが口を開けたその時だった。

「うわっ！」

バランスを崩すルイ。

「何だ！」

紛れもない爆音が街を揺るがせた。

「ルイ！」

「はい！」

二人は即行で食堂から外に出る。その時間ですら煩わしいぐらい二人は焦っていた。

そして再び爆音。煙が出ている。キラベルの洞窟の方からだ。

「——っ！」

何かを叫んだつもりだが実際には声になっていない。

「まさか」

考えられることは一つだ。モンスターの襲撃。

「どうやらこの街は、感傷に浸る事も許してくれないらしいですね」
「ルイ先輩！」

遅れて出て来たクリスとレン、そしてコロ。

「どうしたんですか？ 一体何が」

「多分モンスターだ。クリス、レン。二人は街の人を非難させるんだ。お師匠様、僕達は——」

「わかってます。急ぎましょう」

『広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！』

重なる詠唱、浮き上がる二人の身体。

「くそっ！ 何だってこんな事に」

遠くの方に見える紅い光。轟音に包まれた街は、夜空を紅く染めていた。

ゲートの街が燃えている。煌々と照らす炎と、その火事の原因を作ったモンスター。

空中から見下ろす街はまるで地獄絵図だ。モンスターは、ケルベロスが二匹、コボルトが五匹。それとゴーレムが三体。街の人が對抗しているが、かなり押され気味だ。

「くそっ！ やめろ！」

ルイは、剣を握り締め風の魔法を解いた。落ちる体。そしてそのままケルベロスに突き立てる。重力を利用したのだ。真ん中の首から縦二つに切裂かれたケルベロスは宝石に姿を変えた。

『広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！』

凜としたエリアルの声。空中から放たれる真空の刃、コボルトの群れは一瞬で宝石に姿を変えた。所詮は狼である。

「うおおおお！」

続くルイ横薙ぎ。蒼い閃光が二匹目のケルベロスを捕らえていた。同時に三本の首が落ちる。電光石火と言わんばかりの二人の連係攻撃。あっという間にモンスターはゴーレムのみとなった。

「さあ、強敵が残りしましたね」

「そうだな」

ゆっくりと空から降りるレン。

ゴーレムは比較的、動きが緩慢だ。だが、その緩慢さには理由がある。巨大な身体に岩で出来た身体だ。並大抵の攻撃はほとんど弾く。そして、その巨体を生かした攻撃力。攻守共に優れているのだ。

「どうします?」

「どうしますって、やるしかないでしょ!」

「了解」

同時に飛ぶエリアルとルイ。ルイは上へ、エリアルは右へ。それぞれの分担を決めたのだ。

民家の屋根を蹴り空高く舞うルイ。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風よ。我は望む! 疾風の刃!」

剣に風の魔法を纏わせるルイ。蒼い刀身は緑色に変わった。

「砕け散れ!」

重力と共に振り下ろされるサイコソード。頭から一気にゴーレムを切裂いた。そして、後ろに飛ぶルイ。刹那、内側から真空の刃がゴーレムを刻んだ。まずは一匹。

「蒼い衣を纏いし者。すべてを蒼に染める水帝よ! 偉大なる汝の力を示せ! 我は願う! 蒼の槍竜!」

続くエリアルの詠唱。

詠唱が終わった瞬間、蒼い水の槍がゴーレム目掛け串刺しにする。そして、絶命。二匹目撃破。

「お師匠様!」

「ええ」

二人は再び地面を蹴った。今度は二人とも上空へと飛んでいる。

『金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！』

重なる叫び声。二人の手から放たれる閃光は螺旋を描きながらゴーレムに向かっていく。そして、膨れ上がる炎。凄まじい連係を見せる二人。炎に包まれたゴーレムは宝石に姿を変えていた。

「よっしゃー！」

落下しながらそれを見る。

着地すると同時に街の人たちが駆け寄ってきた。

「兄ちゃん達、強いな」

一瞬にして二人の周りには人盛りが出来ている。

「おかげで街の被害が最小限で済んだよ」

さつきは夢中で気がつかなかったが壊れているのはごく一部だった。

「この街には、聖術部隊はいないのですか？ 仮にも経済力のある街ですよ」

聖術部隊とは、街の治安を守る為に発足された部隊の事である。少なくともそこそ腕の立つ魔術士がいてもおかしくないはずなのだ。

「それは無理だな。全員氷漬けにして殺した」

後方から響く声。聞き覚えのある声。沸きあがる憎悪。

「リク！」

「強いねえ、お二人さん」

右手には長剣を左手には真紅の宝玉を持っている。

「限界突破に耐えたのか？」

驚愕するルイにリクは高らかに笑った。

「ああ、残念ながら、俺は人間じゃないんでね」
「くっ！」

「それに俺はこれを手にした。こんな所で死ねるか」

リクはそう言って左手の宝玉を見せた。

「レグナの眼だ。これさえあれば俺は無敵になれる」

そう言ってリクは右手を後ろに引いた。

「小僧！ 確か一年前に見せてもらった貴様の魔法剣はこうだな」

ゆっくりと詠唱するリク。

「水の魔王、水獣^{マンティコア}よ。その呪われた水を我が剣に宿し、全ての者が
絶命する力を我に与えよ！」

聞いた事の無い詠唱。多分、奴のオリジナルの魔法だろう。不気味な音が辺り全体を包む。刹那、リクの剣に水が纏わりついた。

「知ってるか？ 水は鉄さえも斬る事ができる」

鋭くそして極限まで細い刃。時として水は鉄をも切裂く武器になるのだ。

「賢者……そんな馬鹿な」

驚愕するルイとエリアルに、リクは一言告げた。

「少し違うな。転生した俺は聖戦士だ。だがな、レグナの眼で閻魔性も手に入れたのさ。つまり擬似的に賢者になったのさ！ 行くぞ！」

刹那、目にも止まらぬ速さで移動するリク。真っ直ぐルイに向かってくる。とつさに剣を構えるルイ。

そして、剣は振り下ろされた。

「生憎、僕の剣の刀身は鉄じゃないんだよ」

「ほう、魔力で出来た剣か。面白い武器だな」

リクの太刀を受け止めたルイ。

カチャカチャと鏢のぶつかる音が響いた。激しい鏢迫り合いが続く。

「ふん、腕を上げたみたいだな。小僧。だが、まだ握りが甘いな」
凄まじい力が上空に向けて走った。剣を弾かれたのである。回転して地面に刺さるサイコソード。

「ルイ！ 後ろに飛んで！」

上空から聞こえるエリアルルの声。それと同時に後ろへ飛ぶルイ。

「暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの雷！」

まるで雷の様に凄まじい音と共に一筋の光が落ちる。

「レグナの眼よ！ 絶対障壁を我に！」

刹那、レグナの眼が怪しく光り、リクを包み込んだ。螺旋状に広がる無属性の魔力。ルイとは比べ物にならないほどの強力な魔力。そして、その魔力は、閃光をもかき消した。

「残念だったな。もう一年前の様には行かないんだよ。俺には、魔法は効かん」

ゆっくりと着地するエリアルル。

「そろそろ、終わりにさせてもらっ」

冷たく言い放つリク、その瞬間リクの姿は消えた。正確には眼で追えなかったのである。凄まじい速さで移動するリク。そして、

「死ね」

エリアルルの目の前に現れたリクは躊躇う事無く剣を振り下ろした。

「させるか！」

いつの間にかサイコソードを拾ったのかルイがラルヴァの剣を受け止めた。

「お師匠様！ 逃げて！」

「邪魔だ、小僧！」

エリアルに気をそらした瞬間を狙い、リクは剣を突き出した。

「ぐはっ！」

鮮血を吐くルイ。リクの攻撃はルイの胸部を捕らえていた。

「ルイ！」

エアリアルの身代わりになったルイ、その胸からはラルヴァの剣が生えていた。

「ふはははは、一年前もそうだったな。あの時は殺し損ねた様だが今回は確実にしとめて……っな！」

一瞬後、引き抜かれるラルヴァの剣。ルイが自らの力で引き抜いたのだ。

「甘いんだよ！」

振り下ろされるルイのサイコソード。リクの身体を斬り付ける。

「形勢逆転だな」

薄っすらと笑うルイ。

「ぐっ！ 何故だ。完全に心臓を突いたはずだ。何故死なない！」
「死ぬはず無いさ」

ルイはそう言ってバンダナを解いた。風に揺れる前髪。そして、露になる六芒星。

「僕は既に死んでいるんだから。だからどんな攻撃を受けても、痛いだけなんだよ」

ゆっくりとサイコソードを這わせるルイ。
そして、そのまま喉元に突きつけた。

「さあ、どう償ってもらおうか？」

不適に笑うルイ。

「それだけじゃないです。レグナ復活も諦めてもらいますよ」

いつの間にかリクの背後に周るエリアル。

「なにをする気だ」

「さあ、何でしょう」

につこりと笑ったエリアルはリクの左肩に手を掲げた

「金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！」

一筋の閃光は一直線に走りリクの手を包み込んだ。膨らむ炎、そして爆発。左腕を爆発させたのだ。炭化したリクの腕。手先に残されたレグナの眼だけが無気味に光る。

「うがあああつ！ き、貴様！」

突きつけられたサイコソードを払い、エリアルに飛び掛るリク。だがそれも虚しくルイに阻まれてしまう。襟元を掴まれたのだ。

「邪魔だ！」

閃光が走る。リクを掴んでいたはずのルイの手はそこには存在していなかった。ラルヴァの剣で斬り落とされたのだ。それだけではない、突発魔法を使われたらしい。足と腹部には無数の氷の槍が突き刺さっていた。だが、ある程度の時間は稼げたらしい。そう、エリアルが詠唱を唱えるだけの時間は。

「ちっ！」

エリアルが魔法を放とうとした瞬間、勝ち目が無いと悟ったのだろつか。リクは、地面を蹴った。高く跳びエリアルを飛び越えた。

「今日は引いてやる。まだ俺は死ぬわけにはいかない。次だ。その時こそ殺してやる」

そう言い残しリクは跳んだ。

「待て——っ！」

追おうとするルイ、だが傷ついた足では追いつく事が出来ずすぐに見失ってしまった。

「大丈夫ですか？ ルイ」

「ええ。何とか……。でも、ちょっと身体を酷使し過ぎたみたいで

す」

緊張の糸が切れたのか、地べたに座り込むルイ。光の魔力を解放して斬られた左腕をくつつける。

「駄目だ。……眠い」

ゆっくりと本能に身を任せていくルイ。

薄れ行く意識の中で最後の力を振り絞って口を開く。

「お師匠様。後はよろしく」

こうしてルイの意識は闇に呑みこまれた。まるで自分が死んだあの時のように……。

第七話 夢

――夢。

――夢を見ている。

――忘れたくても忘れられない過去。

――あの日、僕は死んだ。

「お前の名前は？」

剣を構える少年。ルイだ。エリアルもその横で杖を構えている。

「リク・カミール」

男は不適に笑う。殺伐とした眼光。そして、長い片刃の剣。ラル
ヴァの剣だ。

燃え盛る建物、剥がれ碎ける石畳。

崩壊した街と幾つもの死体。酷く血の匂いがする。気を抜けば自
分の精神がおかしくなってしまう。そんな状況だった。

「お前、自分が何をしたか判ってるのか？」

目つきが鋭くなるルイ。感情が爆発する寸前だった。

「当然だ。殺人だよ」

剣に自分の舌を這わせるリク。血を嘗めているのだ。

「じきにお前達もそこに並ぶさ。そいつ等と同じようにな」

背筋が凍るような台詞。

「貴様！」

跳び出そうとするルイ。だが、

「落ち着きなさい、ルイ」

ルイの行動はエリアルによつて静止された。

「リク……と言いましたね。目的はなんですか？」

エリアルはあくまで説得を試みるらしい。

「さあね、世界の破滅とでも言っておこうか？」

挑発するリク。

「私達は貴方を捕まえる気はありません。剣を置いて引く気は？」

問い掛けるエリアル。

「一切無い。近づく者は斬る！」

構えるリク。そして強く地面を蹴った。

「死ね！」

瞬時に詰められた距離。

だがルイはその行動を既に読んでいた。
金属同士がぶつかる高い音が響き渡る。

「やるな。だがこれはどうかな？」

不適な笑みを浮かべるリク。刹那、無数の攻撃がルイを狙う。
上段、中段、下段、様々な攻撃をしてくるリク。そして恐ろしい事にリクの攻撃は全て急所を狙っているのだ。

「くっ！」

冷静に剣筋を見切り、それを自分の剣で受け流すルイ。だが、それも長くは持たないだろう、リクの放つ攻撃の一発一発が酷く重いのだ。危険な焦燥感が芽生え始める。

「これでどうだ！」

身体を半回転させて剣を薙ぐ。遠心力を剣にのせ力任せの攻撃を放つリク。

「くっ！」

バク転の容量で剣の軌道を躲すルイ。別に格好をつけてやったわけではない。剣の軌道をブリッジで避けジャンプで距離を離れたのだ。

「お師匠様！」

後方で既に構えていたエリアル。

「金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！」

放たれる閃光。一直線に向かう熱線はリクの足元で爆発した。そして、土煙を上げる。

「——っ！」

一瞬だがその土煙で怯むリク。

「もらった！」

下から突き上げられたルイの剣がリクの剣を跳ね上げた。回転して落ちるラルヴァの剣。刀身が下がり石畳に突き刺さる。

「さあ、どうする？」

剣を突きつけるルイ。

「甘いな」

リクはそう呟くと信じ難い行動に出る。

「うあああああああ！」

咆哮と共に自分の左腕をルイの剣に突き刺したのである。

「しまった！」

これが、どんな意味かを悟った時、ルイの手からは剣が離れていた。

リクは咆哮と共に筋肉を収縮させて抜けなくしたのだ。

「はあ……はあ。形勢逆転だな」

荒い息遣い、滴り落ちる血潮。そして、剣はルイに突き付けられた。

「梃子摺らせやがって。さあ、どんな風に死にたい」

ルイの右手、左手、左足、右足と順に剣を這わせるリク。

「さあね」

あくまで挑発する態度のルイ。

刹那、左腕に鋭い痛みが走る。突き刺さる剣。

「うぐっ！」

「ルイ！」

「大丈夫です。お師匠様」

そう言ってルイは俯いた。

「まずはさっきのお礼と言った所だ」

引き抜かれる剣。だが、ルイはそこを狙っていたのである。俯いたのも、その動作を悟られない為だ。

「暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの
刀剣！」

刀身を伝い走る電流。魔法剣を応用したのだ。電撃独特の音が辺
りに響き渡る。

「ぐああああ！」

崩れ落ちるリク。

「貴様……賢者だったのだ」

「ああ。そうだよ」

素早く剣を奪うルイ。

「お師匠様！ 剣を！」

「はい！」

急いでラルヴァの剣回収に向かうエリアル。

「きゃあ！」

刹那、エリアルの悲鳴が響き渡る。

「お師匠様！」

ふとエリアルのほうを見るとラルヴァの剣が浮いていたのである。

「切り札は取っておかないとなあ」

不敵な笑みを浮かべるリク。

「あの剣はな、魔力で遠隔操作が出来るのさ。だから、こつする事もできる」

空中で静止したラルヴァの剣はリクの言葉に反応するようにエリアルに向かっていった。

「お師匠様！」

エリアルが反応するも距離が近すぎる。咄嗟の判断だった。だがその刃はエリアルには届かなかった。

ルイが自分の身体を盾にエリアルの前に身を呈したのである。

「ぐがつ」

貫通する刀身。口の中に広がる血の味と匂い。吐血したのだ。息が出来ない。剣の軌道は肺を貫いていたのだ。

「ルイ！」

「ふははは、ふはははははは！」

高らかな笑い声と共にルイの意識はゆっくりと閉ざされていった。

酷くだるい。何故だかそんな感じがした。急速に意識が戻る中、

そんな事を考えていた。

開眼した直後、目に飛び込む物。それは、天井だった。暗い部屋。見慣れた天井。自分の部屋だ。身体を起こしたルイはある事に気付いた。リクだ。あの子の記憶がまったく無いのだ。

「目が覚めましたか？」

不意に聞こえる声。優しく聞きなれた声だった。

「お師匠様。リクは、あの子はどうなっただけですか」

「……逃げました。あの子、宮廷の援軍が来てくれて私達を助けてくれたんです」

「……そう、ですか」

気落ちするルイ。

「ルイ、落ち着いて聞いてください」

「はい？ どうかしたんですか？」

だが次の瞬間ルイは自分の耳を疑う。

「私は、あなたにネクロミノコンを使いました。これがどんな事だか判りますか？」

ネクロミノコン、死者蘇生に使われる禁呪である。つまりそれは、自分が死んだという事を意味している。

「何、冗談言ってるんですか。僕は意識を失っただけじゃないですか」

そう言ってルイは自分の心臓に手を当てた。
そして、ルイは自分のとった行動に深く後悔する事になる。
心音が聞こえなかった。それだけではない。脈も聞こえない。

「え？」

信じられないような口調でルイが口を開いた。

「心音が……しない。でも……でも、そんな事って」

明らかに焦りの色が見える。

「じゃあ……僕は不死人アンデッドなんですか？」

ルイは短く応えた。だが、その声は震えていた。
目からは涙が溢れている。

「……はい」

冷酷に伝えるエリアル。そして、エリアルと初めて視線がぶつかる。

「……眼の色が」

エアリアルの眼の色が片方だけ変わっていた。エアリアル両眼は燃えるような紅い眼だった。だが、その右眼は碧眼に変わっている。
ネクロミノコンは死者の身体の一部と術者の身体の一部を交換する事で魔力の供給を図る術だ。つまりエリアルはルイの右眼と自分の右眼を交換したのだ。
そして、ゆっくりとエアリアルが口を開く。

「ルイ。あなたは、今、自分が死んだと思っているのでしょうか。だから涙を流している。違いますか？」

凶星だった。どんなにこの世界に留まっても自分は死んだ存在になる。

「そんな、バカな事って。だって僕には意識があるじゃないですか！ 身体だって自由に動く！」

「それは、あなたが死ぬ間際、つまり死ぬ直前にネクロミノコンをかけたからです。完全に脳が動きを止める前に蘇生させれば脳は活性化される」

「……そんな」

「……」

「うああああああ！ 何で！ 何でこんな事に！」

取り乱すルイ。

「落ち着きなさい！」

「落ち着いてなんていられない。僕は！ 僕は死んだんだ！」

「お願い。落ち着いて」

エリアルは優しくルイを抱き締めた。

「何でこんな事に……」

嗚咽交じりのルイの声は次第に小さくなっていった。身体中の力が抜けエリアルに身体を預ける。

どの位そうしていただろう。

五分？ 三十分？ 一時間？ もしかしたら一瞬なのかもしれない

い。

沈黙した二人の空

間を最初に打ち壊したのはエリアルだった。

「ルイ。あなたは確かに不死人になった。でも、今、私の手の中にいるのは、間違いなくあなたでしょ」

「……」

「それって、あなたの存在はまだ消えてないって事ですよ。ただし寿命は決まっちゃいました」

ルイの寿命。それは、術者、つまりエリアルが死ぬ時までだ。

エリアル目に涙が溜まる。

「それで、充分じゃないですか。あなたはまだここに存在している」
「……はい」

小さい声。でも、しっかりとしていた。

そして、エリアルは自分にまわされた手に少しだけ力が入るのを感じた。

——それから数時間後。

どんな状況であっても朝日はすべての者に平等に訪れた。

「お師匠様」

窓から差し込む光がルイを照らす。

「僕は、……僕は、これでよかったのかもって思いました。だってお師匠様は生きてるんだもん。さっきまでずっと考えて気がついたんです。だから言います。……僕はお師匠様の事が好きです。どんなに辛くても、悲しくとも、僕はお師匠様を守れたんです。好きな

人を守れたんです。これってよく考えたら幸せなことなのかも知れない。そして僕は、これからもお師匠様を守っていきたい。これって我がままですか？」

穏やかな口調。優しい笑顔。

「……いいと思いますよ」

そう言ってエリアルは、ルイの唇に自分の唇を重ねた。それがエリアルへの答えだった。

「な、お師匠様！」

真っ赤になりながら取り乱すルイを見て笑うエリアル。

「ありがとう、ルイ」

その言葉にルイは照れを隠すように笑った。

「さあ、ルイ。早く身支度を済ませてください。朝ご飯、食べに行きましょう」

「はい！」

そして、その返事は昨日から止まっていた日常が動き出した合図でもあった。

「ルイ。準備は出来ましたか？」

「はい！ お師匠様」

エリアルの問いに答えるルイ。黒い革でできたジャケットと同色のズボンに身を纏い、額には黒いバンダナを巻いていた。ローブを着ていた頃のルイは既に見る影も無いくらい行動的なスタイルだ。

「さあ、仕事もやめた事だし。リクを探しに行きますか。バリバリ私怨の旅ってね！」

そう言って笑うルイ。

「ええ、手伝いますよ。ルイ」

こうして二人の旅立ちが始まったのだった。

「——っ！」

そこには見慣れた天井が映る。無双亭の天井だ。あたりは暗くまだ夜なのだろう。

「……夢か」

含み笑いを浮かべて再び目を閉じるルイ。

「今度こそ、勝ちましょうね。お師匠様」

ルイはそう呟くと再びまどろみに身を任せた。

第八話 精神の契約

ルイとリクの死闘から三日が経過した。

一向にリアクションを起こさないリクだったが、ついに行動を開始したのである。

無双亭の窓から見える蒼い光。まるで、ゲートの街を取り囲むようにその光は発生していた。

「まずい事になったね」

呟くクリス。四人と一匹はテーブルを囲むようにして座っていた。ゲートの街を包む蒼い光。それは結界である。

「何でリクはこんな事を」

問い掛けるルイにクリスは冷淡に答える。

「レグナを復活させる為には生贄が必要なんだよ。シグの悲劇って知ってる？」

「ええ、一応は」

三百年前、レグナが生まれたと言う街だ。街は永久凍土に包まれ消滅したと言われている。

「実はね。三百年前、私もあの街にいたんだよ。あの時も同じ光景だった」

ルイとエリアルに衝撃が走る。

「その時はどうなったんです？」

恐る恐る問うエリアル。

「皆死んだよ。私以外ね。私は精霊に助けてもらったんだよ」

「そんな。じゃあ、この街も……」

俯くエリアル。

「おそろくね。でも、まだ方法が無い訳じゃないんだよ。エリアルさん」

含み笑いを浮かべるクリス。

「結界を張ると言うのはどういう事かわかる？」

「まあ、基本的には外部からの侵入を防ぐ為ですけど」

「違う。私が言いたいのはそこじゃないよ。術者も結界の中にいると言いたかったんだ」

ハッと何かに気付いたエリアルとルイ。

「そうか、つまりリクがまだこの街にいますと言う事ですネ。リクは、この街でレグナを復活させようとしている」

「そうっす。リクがレグナを復活させる前にそれを阻止すれば……」

「と言うわけで、私とレンは今からはじめを取りに行く。場所はキラベルの洞窟だよ。魔法追跡で居場所を掴んだんだ。二人はどうする？」

——魔法追跡。現場に残された魔力を視覚化させ、相手を追うと言う光魔術だ。ただ、この術は時間に左右されやすく条件が揃わな

ければまったく使う事が出来ない。その術をいとも容易く使うクリス。やはり生まれ変わりとは言え大聖女、ハーネ・ライコスの名は伊達ではないのだろう。

クリスの問いにエリアルは笑った。

「愚問ですね。所詮、ここに居ても死ぬかもしれない。だったら私は自分の可能性にかけますよ」

「僕もお師匠様と同じだよ。それに僕は、リクが許せない」

「決まりっすね」

笑みを作るレン。

「と言いたいけど、普通の人間が精霊に喧嘩を売るなんて無謀すぎる」

精霊とは早く言ってしまえば魔の根源だ。そもそも魔法を行使するのに精霊の力を借りている人間にとって、それは致命的ともいえる。

「って言ってもなあ」

頭を抱えるルイ。精霊の力を借りずに出来る魔術を思い浮かべる。だがまともな案が出てこない。

「何か対抗できる手段は？」

結局、いい案が出てこなかったのでエリアルに丸投げしてみる。

「うーん、魔法以外となれば召喚術とかがありますが。アイテムを作るのに時間がかかりすぎてしまいますね」

召喚術や、黒魔術と呼ばれる類のものは皆、術者の魔力がしみ込んだ力オスアイテムを媒体として行使される。そして、そのアイテムに魔力をしみ込ませるのは一日やそこらでは到底出来るものではない。

「……となると」

やはりエリアルもいい案が出てこなかったのだらう。そのまま考え込んでしまった。

「やっぱり駄目っすか」

それを見越したレンが口を開く。

「それじゃ、率直に聞きます。俺と契約してみませんか？」

真っ直ぐな視線が二人に注がれる。

「契約？」

問い掛けるルイ。

「精神の契約っす。まあ、知らなくて当然なんですけどね。俺を除いたここに居る三人の中でそれを経験しているのはクリスだけです。精神の契約を受けた物は、精霊に魅入られた事になるっす」
「相手は氷の精霊だしね。だから炎の精霊であるレンと契約して対抗手段を作るのさ。簡単に言えばパワーアップだね」

「おお」

エリアルと、ルイから歓喜の声があがる。レンの打ち出した打開策に純粹に感激する二人。

「だけど相当きついっすよ。生半可な事では契約できないっす。覚悟してください」

レンはそう言って無気味に笑った。

「了解。簡単にこなしてやるさ」

「判りました。私も全身全霊をかけて挑みましょう」

強気な発言を飛ばす二人。

「言ってくれますね。でも、いい眼だ。これなら成功すると思います」

レンはそう言って二人に向けて両手を翳した。既に、言葉づかいが変わっている。それだけ真面目な儀式なのだろう。

「では、精神の契約を始めます。自我をしっかりと保って。俺が言えるのはそれだけです」

薄っすらと笑うレン。そして、それが儀式の始まった合図でもあった。両眼を瞑り、先ほどまでの空気とは一転し凜とした空気が辺りに広がる。

そして、

「我、願うは力の解放。我、願うは永久の契約。我願うは闇を打ち払う紅の力！」

詠唱をするレン。刹那、紅の軌跡が二人を囲む。そして、その軌跡は魔法陣を描いた。

無気味に光る六芒星の魔法陣。続けざまにレンの口から発せられる呪文。

永遠と続く呪文は、まさに覚悟を決めろと言わんばかりのものだった。そして、ようやくレンが口を閉じた時、眩い光が二人を包んだ。魔法陣が光り出したのである。

そして、その瞬間二人は悲鳴をあげた。

「うがあああああ！」

「ひぐうううっ！」

頭を抑えるルイと心臓を抑えるエリアル。信じられないほどの痛みが、二人を襲う。心臓には誰かに掴まれている様な圧迫感。そして、頭は木槌で叩かれているような強烈な衝撃。

「うあああああ！」

よほど苦しいのか、二人は声を挙げずにはいられない。その場に悶える。二人の座っていた椅子は倒れ、テーブルは食器と共に雑倒される。

「あああああ！」

強い耳鳴り。今はそれにじっと耐えるしかなかった。

そんな中、笑い声のようなものが聞こえる。レンの声だ。だが、いつもの感じとは少し違う。今のレンは人間としてのレンではなく精霊としてのレンなのだ。

『貴様等の力はそんなものか』

続けて聞こえた声。脳に響くレンの声。

『その程度で俺に認められようと思っていたのか？』

「うるさい！ うるッ——うああああ！」

慟哭のような叫び。震える手。二人は限界を迎えようとしているのだ。

「あぐっ！ ぎっ、くうううう！」

頭を壁にぶつけるルイ。鮮血が飛び散る。

『ほう、今の耐えるか、そうこなくては面白くない。次は耐えられるかな？』

刹那、今までに無いほどの強烈な痛みが二人を襲う。心臓は握りつぶされそうな程強く、頭はまるで割れる様な酷い痛み。激しい嘔吐感にかられる。

『壊れる！』

「うぐっ！ うああああ！ くっ！ 痛みは……邪魔だ！」

「ぐっ！ あああああ！ 私は、……私は負けない！」

総ての気合を声に込める。

その瞬間、総ての痛みが消えた。そして、二人を囲む魔方阵の光は消えて行った。

荒い息、張り詰めていた緊張が一気に解ける。定まらない焦点。全てがだるく身体を起こす気力も無い。どうやらエリアルも同じようだ。

「終わったよ」

クリスの優しい声。

「み…たい…だね」

かすれた声。うまく声がでないようだ。

「何とか… 私達は耐えられたみたいですね」

同じくかすれた声。

「二人ともよくやったす、生半可な事じゃ契約できない理由が判ったでしょ。久しぶりの精神の契約でちょっと張り切っちゃったけど安心しました」

歡喜溢れるレン。一部余計な言葉も入っているが、二人の事を本当に喜んでいるらしい。

「レン。後で…しばらく」

「レンさん… 覚悟しておきなさい」

殺気立つ二人はそう言って力尽きた。

「… 逃亡していいですか？」

「結果が張ってあるのにどうやって？」

「い、いや~~~~~！ リクのヴァカ~~~~！」

クリスの冷たい突っ込みにレンの慟哭の叫びが無双亭に響き渡る

のだった。

「……酷いな、こんな事するなんて」

呟くルイ。ルイの瞳に映る物。それは銀だ。一面を銀が支配していた。

氷と雪で出来た世界。凍てつく空気は街に存在する物全てを凍りつかせていた。

「酷いのはルイ先輩でしょ。俺はずっと謝ってたのにさあ」

半日ほどして二人が意識を取り戻した後に待っていたのは、ルイの鉄拳だった。ぼこぼこに殴られたレン。やはり体術では敵わない様である。

「レンが調子に乗るからだ」

「む……」

「街の人はどうなんですか？」

問い掛けるエリアル。

「気配は感じる。今の所は生きているみたいだけど。……時間が無いね。私達はレンの力で寒さを緩和できるけど街の人達は凍死する可能性もでてくる。急がないと」

四人は足を速めた。洞窟は凍気が満ち溢れていた。凍りついた岩肌凍てつく空気。洞窟はまさに天然の冷凍庫と化している。

「凄いな」

先陣をきつて足を進めるルイ。
一歩一歩重心を確かめる。そうしないと転んでしまうのだ。

「皆、気を付けて。気を抜くと転びそうだから」
「ういっす、……おわっ！」

言っているそばから転ぶレン。

「はあ、言ってるそばからこれだよ」

ルイはそう言って頭を抱えた。エリアルの上ではコロが、肩をすくめている。

「はは、すみません」

そう言っただち上がるレン。だが、滑りやすい氷は容赦なくレンを滑らせる。

「あれ？ よっ！ ふん！」

起きては転ぶを繰り返し、結局、炎で氷を溶かし立てるスペースを作ると言っ羽目になった。

「あううううう。こんなトコで突発魔法を使うなんて情けない」

滝の様な涙を流すレン。だがその涙もすぐに凍り付いてしまった。レンの力に守られている今、それほど寒さを感じはしないが、実際はかなり凄まじい所なのだと実感する四人。

だがそれはモンスターを見た瞬間、改めて思い知る事になるのだ
った。

「何だ、あれ」

驚愕の声を上げるルイ。

「見た所ケルベロスだね」

冷静に答えるクリス。ゆつくりと剣を鞘から引き抜き構えた。

「そりゃ見れば分かる、……いや、やっぱわからん」

「言ってる事が支離滅裂ですよ。ルイ先輩」

「そうだけど」

今ルイたちの目の前にいる生物。それはまったく異形と言っても
いいだろう。姿形はケルベロスだ。ケルベロスなのだが……。氷で
できているのである。本来ケルベロスは毒々しい赤い色をしている
だが、今目の前にいるケルベロスは透き通るような青で構成されて
いるのだ。一瞬、ただ単に凍りついただけとも考えることはできた
だが、それは瞬時に否定された。それでは説明のつかない事がある
からだ。ケルベロスの体内は透けていたのだ。

「あれじゃ、化物じゃないか」

「ルイ先輩も充分化物ですけどね」

その言葉にカチンと来るルイ。だが本人は、一切悪気はなさそう
だ。気付いていない所がまた癪に障る。

「自分だって化物の癖に」

「失礼な、俺は精霊です！」

ケルベロスを前にして、くだらない口喧嘩が始まる。

「黙りなさい！ ほら、来ますよ！」

ついに、エリアルが雷が落ちた。それもそのはず、ケルベロスはルイ達の射程範囲内に足を踏み入れたのだ。

咄嗟に柄を引き抜くルイ。そして、刀身を出現させる。

「まあ、いい。相手が氷だったらこうすればいい事だ」

突如、刀身が赤く変化する。突発魔法を魔法剣に変えたのである。

「クリス！ 行くよ！」

「あいよ！」

地面を強く蹴る二人。紅い二本の閃光がケルベロスを捉える。
…はずだった。

「あらっ！」

「おわっ！」

地面を蹴った瞬間に転んだのだ。

「ああ、もう！ 戦いにくいたらありやしない！」

凍りついた地面。これもリクの作戦の一つなのだろうか。そんなの事を考えながら転ばないようにゆっくりと起き上がる。

「ゲウウウウウ」

唸るケルベロス。大きく息を吸い込み吹雪を吐き出した。

「ぐっ！ こいつ、吐き出すものまで氷なのかよ！」

直撃を食らうルイ。徐々に氷に覆われていく。

そして、

「ルイ先輩！」

氷漬けになったルイがそこには居た。

「まあ、大丈夫です。ルイは、死ぬ事はありませんから」

につこりと笑うエリアル。何かが激しく間違っているような気がするが今は置いておこう。

「それよりも、早くケルベロスを倒しましょう。じゃないといつまで経ってもルイは、あのままですよ」

そう言つてエリアルは自分の手に炎を灯した。

「やっぱり、氷は溶かしてしまうのが一番ですよね」

「それも、特大のね」

そう言つたクリス。やはりクリスの手にも炎は灯されていた。

「さあ、くらいな！」

レンの声に合わせて三本の炎が放たれた。三本の炎は互いに交わり、洞窟全体を埋め尽くすほどの巨大な一本の炎に変化する。その炎は容赦なくケルベロスを飲み込んだ。

「よしっ！」

凄まじい水蒸気を上げる洞窟。地面には氷が溶けて水溜りが出来ている。そして、その水溜りに沈む宝石。ケルベロスだった物だ。

「ふう、後はルイを氷から溶かせれば良いだけですな」

全身を氷結させられたルイ。身動きが取れないのだろう。軽いオブリエになっている。

「ははは。ルイ先輩、置物みたいっす」

指を指して笑うレン。

「もう。笑い事じゃないですよ」

「それにしても、カチンコチンになっちゃって。普通の人間なら間違いないで死んでるよ」

コンコンと氷を叩くクリス。まるで氷の棺のようである。

「キュー〜」

エリアルルの肩で鳴くコロ。

「なに？ 早く溶かしてやれって？」

レンの問いに首を縦に振るコロ。

「しょうがないっすね。じゃ、いっちょやりますか」

その声に合わせて腕に炎を灯すレン。

「何がしょうがないって？」

その声に振り返るレン。そこにはびしょ濡れになったルイが居た。

「置物で悪かったな。全部聞こえてんだよ」

珍しく口調の違うルイ。はっきり言って怖い。目は据わっている。

「せ、せせ、先輩。どうやって……」

そこまで言っただけで気付くレン。突発魔法を使い自力で氷を溶かしたのだと言っ事に。

「さあ、覚悟は出来てるかい？」

ゆっくりと呟くルイ。

「い、いやあああゝゝ！」

ルイの目が怪しく光り、レンの悲鳴が洞窟の中を木霊した。

第八話 精神の契約（後書き）

プロパティを見たら七年前に作った小説ということが判明。
七年前の私って、本当にストーリー構成が下手くそですね
ちよつと自己嫌悪

第九話 氷の脅威（前書き）

第九話 氷の脅威

「くそっ！ どうなってんだよ。この洞窟は！」

毒づくルイ。スケートのように足を滑らせ、逃げる。他の三人も同じようにしているのだ。後方から追ってくるモンスターの大量。それらは、全て氷で出来ていた。

「おそらく、リクが洞窟のモンスター全てに氷の属性を持たせたんだと思います」

冷静に状況を分析するレン。
確かにその通りなのだろう。

「でも、そんな事出来るの？」

問い掛けるルイ。だが、それは意外な人物によって遮られた。エリアルである。

「おそらく、出来るでしょうね。レグナの眼の能力を忘れたのですか？」

「そうっす。さすがっすね。エリアル先輩。多分、リクはモンスターを作る時に自分の能力を掛け合わせたのだと思うっす」

「へえ、そんな事が出来るのか」

「まあ、あくまで推測ですけど」

「それじゃあ、質問ついでに、今この状況を打破する方法は？」

ルイが問い掛けると三人は薄っすらと笑みを浮かべた。

「それはもちろん。ねえ」

「ええ、やっぱり」

「逃げるが勝ちっす！」

「やっぱり？」

四人は後方に向けて炎を放った。隙間なく、放たれる炎。刹那、水が蒸発する音が辺りに木霊した。

「よし！ 逃げるぞ」

滑らせる足を更に速め、地下への階段を目指す。

「ルイ先輩！ 次、右で」

「了解！」

分かれ道を華麗に駆け抜ける四人。先頭を走るルイを筆頭に、疾風の火炎放射器は、地下への階段へと滑り込んだ。

「はっ！」

「ほっ！」

「でりゃ！」

「とうっ！」

それぞれ気合を入れて地面を蹴った。猛烈なスピードで空中に投げ出される四人。

『広大なる大地を駆けける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに
！』

三人の声が洞窟に木霊する。自分達に風の魔法をかけたのだ。光魔法しか使えないクリスは、当然、レンにしがみついている。

「うつひゃゝ、速い速い」

「キュイゝ！」

風を切る四人とその状況を楽しむコロ。どうやらコロはかなりのスピード狂らしい。そして、そのスピードの甲斐あってか、あっという間に地下二階が見えてくる。

だが、そこには当然の様にモンスターが待ち構えていた。

「キュイゝ！」

邪魔だと言わんばかりに咆哮するコロ。それに答えるようにルイが叫んだ。

「君達には構ってられないよ。僕達は無駄な体力は使えないんだよ！」

手から炎を出し、一掃するルイ。まったくその通りだ。決戦は、目前なのだから。

「さあ、急ぐよ！」

そう言うルイ。四人は更にスピードを上げた。

「くそっ！」

ルイ達は地下二階で第二の関門に差し掛かっている。モンスターの
大群と遭遇したのだ。要するにモンスターの巢だ。しかも、相変
わらずモンスターの殆どが氷で出来ている。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに
！」

ミイラに向かって真空の刃が走る。その瞬間ミイラはバラバラに
なり宝石に姿を変えた。

「くっ！ 数が多すぎる！ 何を考えてるんだリクの奴は」

そう言いながらゴーレムに向けて炎を放つレン。

「知らないわよ！ 大方、私達を疲れさそうとしてるんでしょ」

そう答えながらクリスは剣を薙ぎ払った。コボルトが数体、宝石
に姿を変える。

「口を動かす前にモンスターを片付けてください！」

エリアルはそう言って右腕を掲げた。

「金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵
を撃て！」

放たれた閃光がモンスターを焼き尽くす。だがそれでもモンスタ
ーは減らないのだ。

「邪魔なんだよ！」

そう言ってルイは剣を横薙ぎにする。

「くそっ！ 次から次へと」

毒づくルイ。こう考えるとリクは結構、頭の切れる策士かもしれない。この洞窟のどこかのポイントにモンスターを集めておけば、かなりの時間稼ぎにもなる。そして、最大の利点としてルイ達を疲れさす事が出来る。そうすれば自分の戦いが楽になるのだ。

そして、見事にその思惑に引っかったルイ達。

「ここに居るモンスターが全部スライムだったら楽なのに」

「それ、別の意味で嫌です」

エリアルは苦笑した。確かにそれだけスライムがいたらそこら中、べとべとで気持ち悪い。ルイは自分で言うておきながらも少しだけ後悔した。

「あゝ、もう！」

ついに、苛立ちに限界が来たのだろうかクリスが大きな声を出した。

「いい加減に、消えうせろ！」

もう、一人頭二十匹は倒しただろう。四人に疲れの色が伺える。だがその甲斐もあってようやくモンスターは数えられる程度まで数を減らした。

「最後の締めっすね」

レンは、炎を腕に纏い突っ込んでいく。
だが残っているモンスターは強いモンスターばかりだ。急所を上
手く突かない限り一撃で決まる事は無い。しかもほとんどのモン
スターが、敏捷度が高く厄介な奴ばかりだ。

「ちょこまかするな！」

比較的、動きが緩慢なガルムに炎を放つレン。氷で出来ているガ
ルムはみるみるうちに溶けていく。

「暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの
雷！」

エリアルの手から雷が放たれる。
そして、その雷はキメラに直撃した。

「いい加減に死になさい！」

クリスはミイラをすばやく斬りつける。最低八回は斬っただろう。
速くてよく見えなかった。

そして、追い討ちをかけるように突発魔法を放つ。バラバラにな
ったミイラはあっけなく絶命した。各々の凄まじい攻撃は、次第に
だが確実に数を減らしていく。

「さあ、残るモンスターはが五匹、キメラが三匹」
「また、嫌な奴等が残りましたねえ」

エリアルはそう言って苦笑した。

「ルイ、それとレンさん。キメラをお願いします。あいつ等は、氷で出来ていないみたいですから、電撃に弱いはずですよ」

エリアルはそう言って笑った。

「了解」

「ういっす」

「さあ、クリスさん。行きますよ」

「うん」

クリスは、そう頷き九頭龍に斬りこんで行った。その直後にエリアルが放った閃光が一匹の九頭龍を討つ。

「行くよ！ レン」

ルイはそう言って一直線にキメラに向かって走る。そして、斬撃。だが、キメラは思いのほか堅く、剣が降り抜ける事はなかった。だが、ルイは手を休めない。

「うおおおおお！」

気合と共に激しい連撃が降り注ぐ。

「レン！」

「了解！」

『暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの雷！』

重なり合う声。二本の閃光がそれぞれ一体ずつキメラを捕らえる。

「グアアアア！」

声にならない声を上げるキメラ。そして、二匹は宝石に姿を変えた。

「よっしゃ！ 後、一匹！」

怒涛の強さを見せる二人。

「暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの刀剣！」

刹那、ルイの刀身に紫電が走る。雷の魔法剣である。

「ラスト！」

そう言つてルイはキメラに剣を振り下ろした。

電撃独特の音が洞窟内に響き、キメラは宝石に姿を変えた。

「よっしゃー！」

手と手を合わせるルイとレン。

パンといい音が響く。会心の勝利である。

「終わったみたいだね」

どうやらクリス達も九頭龍を倒したらしく、既に座り込んで休んでいる最中だった。

「はあ、何かリクの策略にはまってしまいましたね」

ぐったりとするエリアル。

「うん。悔しいけど今は少しでも疲れを取ろう」

クリスの言葉。四人は少しだけ休息をした。

目の前にぽつかりと切り抜かれた空間。階段である。

ここを下りれば、リクと出遭ったあの大広間だ。

一步一步、階段を踏みしめる。

近づく決戦の瞬間。この階段を抜ければ激しい死闘が目に見える。
いる。

この一步一步が、酷く重い。

「ルイ。ようやくですね」

「ええ。長かった道のりもこれで終わります。いや、終わりにする」

それは、一年間ルイが望んでいた事の終焉を告げる事になる。

「さあ、見えてきたよ」

クリスがそう言って指を指す。そこに見える終焉の瞬間。

決戦の瞬間は、ゆっくりと訪れた。

第十話 氷の王

目の前に広がる空間。広大な広間。

だが、背筋が凍るような、そんな雰囲気支配していた。部屋は、相変わらず冷気に包まれて凍りついていたが、この雰囲気は寒さとかそう言う物ではない。それは、純粹に恐怖なのだ。

凜とした空気。そして、その部屋の中央に奴は居た。

殺伐とした眼光。見る物を圧倒させる威圧感。そして、その眼光はルイ達に向けられた。

「来たな」

ゆらゆらと、まるで煙の様に立ち上がるリク。

「コロ、どこかに隠れていなさい」

「キユイ」

エリアルルの肩の上で頷き飛び降りるコロ。そのまま階段の方へと走る。

「ほう、あいつ等を倒したのか。流石とでも言っておこうか」

「ざけんな！ あんな雑魚にやられるかよ！」

剣を引き抜くルイ。同様にクリスも剣を引き抜いた。

「私達は、お前を止める為に……レグナの復活を止める為にここまで来たんだ。あんな所でやられてたまるか！」

「俺を、止めるだと」

クリスの発言を嘲笑うリク。

「残念だな。レグナは時間が経てば復活する」

「さあ、それはどうか。少なくとも、街の皆が死ぬ前にお前を倒せば復活は止められるさ」

呟くレン。右手には炎を纏っている。

「勝てるのか？」

鬼火にさらされたラルヴァの剣が怪しく光る。

「勝つさ。俺達は勝たなきゃいけないんだ！」

レンはそう言って、炎を放った。一筋の炎がリクを目掛けて走る。まるで津波のように炎がリクを呑み込んだ。氷を溶かし、全てを焼き尽くすような灼熱の炎。

「うおおおお！」

気合と共に、炎を操る。まるで鞭の様な動きを見せる炎。叩き付けるような炎の連撃が続いた。

「これで、……どうだ！」

刹那、炎が爆炎に姿を変える。激しい爆発音が洞窟内に轟いた。

「ふっ、これで終わりか？ だとしたらお前には、勝機は見えない」

凄まじい水蒸気の中から聞こえる声。嘲笑うように捨て台詞を吐く。

「さあ、それはどうかな？」

笑みを見せるレン。

「ね、ルイ先輩」

「油断大敵だね。僕達が四人居ると言う事を忘れたのかい？」

リクの背後に回り、サイコソードを突きつけるルイ。

「魔法がお前に効かないって事は、先輩達に聞いてたんだよ。俺が炎を放ったのは氷を溶かし、水蒸気で煙幕を張る為さ」

不適に笑うレン。

「ほほう。考えたな。地形を利用した攻撃とはな」

「ずいぶん余裕があるじゃないか」

首筋を這うサイコソード。

「当たり前だ。貴様如きにやられると思っているのか？」

刹那、無数の氷の槍がルイに突き刺さる。

「うぐっ！」

苦悶の声を漏らすルイ。

「邪魔だ！」

リクは、あっさりとサイコソードを払い、ルイに蹴りを入れた。

「さあ。血が沸き立つほどの戦いをしようじゃないか」

呟くりク。戦いの幕は静かに切り下ろされた。

「さあ、串刺しにしてやるよ」

リクの言葉に反応するように、無数の氷槍が出現する。リクの突発魔法だ。

「レン。まずは、お前からだ」

一瞬後、レンに向かって無数の氷槍が迫る。

「俺も甘く見られたもんだね」

冷静に弾道を見切り、横に跳ぶレン。後方でガツと言う音がする。恐る恐る、後方に目を向けると先ほどの氷槍は壁に突き刺さっていた。恐ろしい破壊力である。

「くっ！」

体勢を立て直しながら呻く。

「躲したか」

いつの間に懷に潜り込んだのだろう。先ほどの氷槍がフェイクだと気が付いた時には全てが遅かった。確実に仕留める一撃を放つために体重を乗せ、足を踏み込み、左から右へと斬り込む。

「死ね」

怜悯な声と共に閃光が走る。剣先が服を翳め、斬り裂いていく。

「おわっ！」

寸での所で後方に跳び、躲すレン。

「くっ！ この野郎！」

突発魔法で応戦するレン。だが、それはレグナの眼によって掻き消されてしまう。

「クリス！」

「あいよ！」

無属性の魔力を展開させている間を狙ってルイとクリスが斬り込む。

「甘い！」

剣だけを残し身を屈め、二本の太刀を防いだのである。長剣でこそなせる業だ。そしてそのまま、右足を突き出し回転した。水面蹴りである。足を払われたルイとクリスはなす術も無く、その場に倒れてしまう。

「暗澹を切り裂く閃光よ。紫電を纏いし鬼神よ。我は願う。裁きの雷！」

上空から響くエリアルの声。ルイとクリスが気を引いている間に風の魔法で移動したのだ。

轟く雷鳴。一筋の光がリクを直撃した。

「くっ！」

苦悶の声を上げるリク。

「油断しましたね」

「ふっ、油断したのはそっちだろう」

刹那、リクは氷槍を作り出しエリアルに向けて投げた。

「きゃ！」

エアルの右腕に刺さる氷槍。痛みで集中力を欠いたのかそのまま落下していく。そして、一瞬後。エアルの身体は堅い地面に叩きつけられた。

「お師匠様！」

「大丈夫……夫」

苦しそうなエリアル。

「エリアルといったな。貴様の弱点は、自分の魔力の絶対な自信だから、効いているふりをして貴様を油断させたのさ」

冷笑を浮かべるリク。

「貴様！」

剣に突発魔法をかけ斬りかかるルイ。

「くつくつく、ルイと言ったな。貴様の弱点はそこなんだよ。仲間がやられた事で怒り、攻撃が大きくなる。そこで大きな隙が生まれるのさ」

「うぐつ」

腹部に見事に決まっているリクの左手。レグナの眼を握り締めたままだ。結果、堅さと重さの両方を兼ね備えた拳が生まれたのだ。崩れ落ちるルイ。

「これはおまけだ！」

突如身体を捻るリク。左足を軸に足首を回転させ、次に腹部を回す。そして、右足を遠心力に任せ弧を描く。重みを帯びた回し蹴りがルイの頭部を捕らえた。吹き飛ばされるルイの体。壁には先ほどレンが躲した無数の氷槍が生えている。

「ぐはっ！」

ルイの身体を貫く氷槍。口から鮮血が散る。吐血したのだ。

「ルイ先輩！」

「おっと、他人の心配をしている暇は無いぞ。次は貴様だ」

「くつ！ この野郎！」

腕に炎を纏い、殴りかかるレン。

「がっかりだな、レン。貴様如きが、この俺に体術で勝てると持っているのか？」

「何か忘れてないかい？ 私も居るんだよ」

後方から聞こえる声。クリスだ。剣を振り被り袈裟切りに持ち込む。

前後からの連係攻撃を見せるクリスとレン。

「ほう、連携か。だがな、ハーネ。貴様の弱点はその踏み込みの甘さだ。充分に踏み込んでいないと太刀筋は軽くなってしまうんだ」

冷静にラルヴァの剣で攻撃を受け流し、右足で蹴りを繰り出してレンにカウンターを入れる。

「レン！」

「隙だらけだぞ。ハーネ」

剣の柄でクリスを横殴りするリク。

「きゃあ！」

恐ろしいまでの格闘センスを持つリク。全ての攻撃に隙を見つけ、その隙を確実に突いてくる。

「ぐっ……ああ」

吹き飛ばされ、床に叩きつけられ、転がりようやく止まる。

頭部からは血が流れていた。

「ふっ、そろそろ終わりにしてやる」

ラルヴァの剣を地面に突き刺し、詠唱を唱える。

「くっ、待てよ。……終わりにするにはまだ早いぜ」

ゆっくりと立ち上がるレン。

「ほう、まだ勝つ気なのか？」

嘲笑うリク。

「先輩。巻き込んだじゃうかもしれないけど……」

振り返るレン。

「好きにきなさい。どっちにしろこのままじゃ……ね」

「はは、だってさ」

笑うルイ。その言葉にはにかむレン。

「さあ、くらいやがれ！」

殺気立つレン。真紅の両眼を見開き詠唱を始める。

「紅の十二翼を持つ竜王よ。汝、爆炎に姿を変え我と共にあらん事を。我は願う、紅蓮の十二翼！」

十二本の紅蓮の光がリク目掛けて放たれる。

「うおおおおお！」

咆哮と共に炸裂する爆炎。地面を抉り、大気は振動し、熱風は炎を煽る。以前とは比べ物にならないほどの威力を見せる。

そして次の瞬間、真紅の光がリクを包んだ。そして、爆発。耳を劈くほどの爆音が辺りに響く。

まるで洞窟が崩れるのではないかと思えるほどの振動。岩壁には亀裂が入り、天井からは氷柱が落下してくる。だがそれ以上は何も起こらない。広い空間と言うのが功を奏したのか、どうやら洞窟のほうがレンの魔法より少しだけ強度が勝っていたらしい。

「どうだ！」

徐々に引いていく紅い光。

「ぐっ。……なんて魔法を持ってやがる」

ようやく姿を現すリク。痛みを耐えるぐぐもった声と荒々しい呼吸。リクの左腕はほとんど炭化していた。レグナの眼だけが不気味に光る。

「くそ、絶対障壁でさえ消化しきれない魔法とはな」

痛みに顔を歪めるリク。

「さあ、お互い余裕は消えたな」

「くっ、そうだな。油断した。こちらも、一人では分が悪いようだ」

リクは静かに呟いた。

「うおおおおお！」

咆哮を上げるリク。

左手を高く掲げると、レグナの眼が眩い光を放つ。

刹那、氷が、凍気が空中に集まりだした。

レグナの眼の能力が発動したのである。

そして、何かの形を象っていく。

とてつもなく、巨大な何かに……。

静まり返る洞窟。全員が息を飲む。

誰一人として動こうとはしなかった。いや、動けなかったのである。

「これは……モンスターなのか」

愕然とする四人。それは、あまりに巨大だった。空洞の半分を占める身体。

そして、大きな上顎と下顎。そして、四本の足。まさしく狼だった。

「氷狼……フェンリル」

驚愕の声を上げるエリアル。

「あっはっはっは！ 貴様等を生贄にしてやる」

氷狼の頭の上でリクは大きく笑った。

息を大きく吸い込み、天井に向けて吐き出す。猛烈な吹雪が天井に向けて放たれた。

崩れ落ちる天井。ただでさえ、レンの魔法で地盤が脆くなっていたのだ。

「くそっ！ あんなの反則だろ」

岩石を横に飛び躲すルイ。

「くつくつく。そんなに軽く行動していいのか？」

刹那、衝撃が走る。前足で払われたのである。

「ぐがつ！」

吹き飛ばされるルイ。身体がバラバラになるような感覚。凄まじい破壊力だ。

「ルイ、しっかりしなさい！ ルイ！」

倒れこむルイに駆け寄るエリアル。

「大丈夫です。……でも、これはちょっと、きついよ」

上半身を起こし薄れそうな意識を、頭を振って無理やりはつきりとさせる。

「おいおい、そんなにゆっくりしていいのか？」

前足を上げ、そしてルイ達の真上で下ろす。

「くっ！」

エリアルを抱きかかえ、強く地面を蹴るルイ。
寸での所で抜け出す。後方で地面が揺れ、轟く凄まじい音。

「ほう、よく躲せたな」

「ふん！　でかくったって動きが緩慢なら意味が無いんだよ」

そう言っただけで足を斬り付けるルイ。

「さあ、それはどうかな？」

——ガッ！

鈍い音が響く。ルイの太刀筋が氷により弾かれたのである。

「嘘だろ」

驚愕するルイ。

「死ね」

リクの言葉に反応する氷狼。前足を器用に動かし連撃を加えてくる。

まるで虫けらの様に逃げ惑い、この部屋で唯一の入り口、階段へと逃げ込む四人。

「くそっ」

息を切らすレン。同じ様に肩で息をする三人。
髪を乱し、服はボロボロに破れ、滲み出る血が激闘を物語る。

「くっ！」

右腕を押さえるエリアル。結構な出血をしている。

「大丈夫ですか、お師匠様」

「はは、あまり大丈夫とは言えないですね。クリスさん。回復をお願いしてもいいですか？」

エリアルはそう言って笑う。とは言え疲労は隠せないらしい。かなり、憔悴している。

「ああ、ちよっと待ってね」

エリアルは袖を捲くクリス。

「うわっ！ こりゃ酷いね。肉が抉れて、骨まで折れてるじゃない。こりゃ、ちよっと時間がかかるよ」

傷口に手を当て、光の力を解放するクリス。穏やかな光がエアリアルを包んでいく。

「ちくしょう、ここに来てあんな化け物だすなんて……」

「まさか氷狼を作るとはね。レン、あんた炎龍とかになれないの？」
「なれるか！」

クリスの問いに突っ込むレン。

「何か手は無いのですか？」

無言になる四人。それは、もう対抗手段がなくなったと言つ事を意味していた。

「いつそ、捨て身で行つてみます？」

サイコソードに炎を纏わせるルイ。刀身は紅く変化した。

「捨て身って言つても……それだ！」
「んあ？」

レンの声に驚くルイと、サイコソードを指差すレン。

「サイコソードの刀身は、ルイ先輩のイメージなんですよ。だつたら、あいつに対抗できるだけの武器を作ればいいんですよ」

「そんな、めちゃくちゃな」

苦笑するルイ。

「でも、何もしないよりはいいでしょ」

「そうだけど、……もう、どうなつても知らないよ」

そう言つとルイは、瞳を閉じた。頭の中で刀身を作り具現化させる。

「……」

呆氣に取られる四人。

「ルイ君。やる気ある？」

刀身を一瞥してから深い溜め息をつくクリス。ルイの作り出した物。それは、ただの棒だった。一応、刀身の長さだけは凄まじく、天井へ向けて一直線に伸びている。

「ええと、もつと扱いやすく強力な剣を……」

焦りながらイメージを膨らますルイ。

だが、そんな状態でイメージが纏まるはずが無い。使えない剣が、構成されては霧散していく。

「……駄目だ。考えれば考えるほど棒しか出てこない」

頭を抱えるルイ。

「ルイ、落ち着きなさい。貴方の使いたい物で良いんですよ」

そう言つて笑うエリアル。優しい声だった。酷く心が和らぐ。そんな感じがした。

「そんなに難しく考えることは無いんです。魔法を使うように、落ち着いて、ゆっくりとイメージを固めて行つて……」

頷き頭の中でイメージを固めていくルイ。より長く、より切れ味が鋭い剣を……。

刹那、まるでハルベルトのような剣が出来上がった。槍を思わせ

る程の長柄。

槍には、基本的に穂先に、刃先をもった平形と、刃先のない棒状の物の二種類がある。

ルイが作り出した刀身は、間違いなく、前者の物だ。つまり、穂先に刃を持っていたのである。

そして、本来、斧刃と呼ばれる穂先の刃の部分には、三日月刀のような弧を描いた刃。ご丁寧に対側には、剣を受け止める為の翼まで付いている。

限りなくポールアームと言う種類の槍に似ているが、これは剣の部類に属するだろう。

斧刃の部分が異様に長いのだ。その長さは、穂先から鍔の部分まで伸びている。

更に素晴らしい事にサイコソードは、どんな刀身を作ろうとも、基本的に柄だけの重さしかない。そして、どれほど刀身が長くても振る速さはまったくと言っていいほど変わらないのだ

槍の性能と剣の素早さを兼ね備えた最強の武器と言ってもいいだろう。

「おお」

一斉にあがる歓喜の声。

「よし、これなら時間稼ぎぐらいはイケるかもしれない。クリス。お師匠様を頼んだよ」

「え、ルイ君……まさか」

「ああ。一人で行くよ。僕は、死なないからね」

振り向き様にはにかみ、そっくり残すルイ。

「ルイ先輩。俺も行きますよ」

立ち上がるレン。

「いや、駄目だ。レンは勝負の要だからね。今は回復するんだ。いいね」

そついい残しルイは、再び戦場に足を向けた。

第十一話 勝機

「ほう。ようやく出てきたか」

呟くりク。

「いささか、人数が足りないようだか？」

「残念な事に今動けるのは、僕だけなんでね」

肩をすくめるルイ。

「馬鹿な奴だ。一人で勝てると思っているのか？」

どうやら相手の失笑をかつたらしい。

「さあ、その余裕がいつまで続くかな？」

につこりと笑うルイ。

直後、ルイの姿が消えた。斬り込みに行ったのだ。

「うおおおおお！」

柄を強く握り締め剣を横に薙ぐルイ。

サイコソードが氷狼の右前足を捕らえ、そして振り抜かれる。切断される足。そして起こる爆発。

「まだまだ！」

そして詠唱。両手は、氷狼の腹部へと向けられていた。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！」

風を操り、まるで、氷狼の腹を搔つ捌くように無数の真空が斬り付けた。

バランスを崩す氷狼。

「どうだ！」

「くっ！　どうやら高みの見物とは行かないらしいな」

このままではまずいと判断したのかリクが氷狼の頭からルイを目掛け飛び降りた。

「死ね」

ラルヴァの剣を突き立てるようにして重力に身を任す。

「おわっ！」

転がるようにして、リクの攻撃を躲すルイ。体勢を立て直し斬撃を放つ。

身をよじり遠心力を味方につけた渾身の一撃だ。長剣とは思えない恐ろしく速い太刀筋がリクを捕らえる。

「くっ！」

ラルヴァの剣を縦に構え、その斬撃を防ぐ。

「ふっ、やっぱり左手がないと力が出ないかい？」

崩れ落ちそうなリクの左腕を見てルイは更に斬撃を放つ。袈裟斬りに持ち込み左手を集中的にねらう。

「くっ！ 調子に乗るな！」

まるで、カウンターを入れるようにリクの剣はルイの腹部をとらえた。

「まったく。頭悪いね、お宅も。僕は死なないっての！」

「ふっ、死なない相手をどうやって仕留めるか知っているか？」

不気味に笑うリク。ゆつくりと剣を引き抜いた。

「しばらくの間、動けないようにすればいいんだ。封印って奴だ。永久凍土に埋もれるがいい！」

刹那、氷狼が二人に向けて猛吹雪を吐いたのである。

徐々に凍り付いていくルイ。一方リクの方はこの猛吹雪の中へ依然としている。流石は氷の精霊なのだろう。

「くっ。今だ、レン！ 撃て！」

「了解！」

叫ぶルイに同調するレン。入り口の所で高々と手を掲げている。

「へっ！ 俺達の狙いは、その馬鹿でかい氷狼なんだよ！」

そう、全ては囷だったのだ。氷狼を倒してしまえば後は手負いの獲物を狩る様な物だ。左手を負傷したリクにこの四人が倒せるはず

がないのである。

「紅の十二翼を持つ竜王よ。汝、爆炎に姿を変え我と共にあらん事を。我は願う、紅蓮の十二翼！」

一瞬後。レンの手から希望の光が放たれた。
凄まじい轟音。巻き上がる炎は氷を溶かし、全ての水分を蒸発させた。

「いつけ〜！」

まるでレンの言葉に反応するように、洞窟を埋め尽くす炎。全てが赤一色に染まっていった。

灼熱の炎が、氷狼とリクを飲み込む。もちろん、ルイも例外ではなかったが。

「怖〜！ 殺す気か！」

炎の中から聞こえる声。ルイの声だ。

「あほ〜！ 絶対障壁がなかったらどうする気だったんだよ〜」

どうやら、洞窟を埋め尽くす炎の中に自分の居場所だけは確保していたらしい。

「それでも、ルイ先輩は死なないでしょ」

「あほ〜。炭化して消える……うわっちいいいいい！」

どうやら、服に引火したらしい。無属性の魔力を放出したまま走り回っている。

「ルイ先輩！ こっちつすよ」

レンがそう言うつと猛スピードでルイが駆け込んできた。まるで弾丸のようである。

「大丈夫ですか？」

「これが終わったら絶対にシバく」

プスプスと煙を出すルイ。

「はは、覚悟しておきます」

苦笑するレン。

「さてと、締めにかかりますか」

ようやく鎮火して行く炎、開けていく視界。岩は焼けて赤くなり、凄まじいほどの熱気が立ち込めている。そして、完全に炎が消え去った瞬間、四人は驚愕した。

「嘘だろ？ あんなので……」

呆然とするレン。

黒く、焼け残った人型の灰。それはおそらくリクなのだろう。いや、正確にはリクだった物だ。

「おい！ リク！ 手前、何、勝手に死んでんだよ」

駆け出すレン。

「納得いかねーぞ！　おい！」

灰を手で救うレン。

「……レン」

その時だった。レンに向かって走る無数の氷槍。

「うがつ！」

鮮血を吐くレン。そのままリクの遺体の横に倒れ込む。

「これで納得がいったか？　レン」

リクの声だ。

「なつ、……精霊体だと」

「ああ、そうさ。レグナの復活の時が来たからな。この身体が邪魔になったのさ」

「なんだって、じゃあ私たちは、……間に合わなかったの？」

膝から崩れるクリス。

「いや、違うな。多分、地上の奴等はまだ生きている。俺の身体と氷狼を生贄に使ったのさ」

刹那、レグナの眼が無気味に光る。

「俺はこれからレグナと同化する。さあ、邪神記の始まりだ」

酷く遅く感じた。目に映る全ての物が遅く、鮮明に見える。

凄まじい魔力。球体が異形の物へと変わって行く。邪神の力が今解き放たれるのだ。

揺れる洞窟。振動する大気。身も凍るような凄まじい凍気と、足が竦むような魔力。

「くっ！ まさか二重に罫を仕掛けているなんて」

肩を落とすエリアル。四人が一番恐れていた事が現実になってしまったのだ。

結局の所、リクは知恵で勝負していたのである。戦いが始まる前、『時間が経てば復活する』と言ったのはこの事だったのだ。

「まずい、ルイ君！ レンを連れて逃げよ！ 洞窟が持ちそうも無い」

崩れた天井が、岩石となりルイ達を襲う。

「くそ！ 今はそれしかないのか」

早急にレンを抱え、全力で階段を駆け上る。

「ルイ先輩……」

力なく口を開くレン。

「なんだよ！」

「すみません。俺の所為で……俺には止める事が出来なかった」

流れる涙。本当に悔しそうな顔をしている。

「あほか！ 弱気な事を言うな、投げ捨てるぞ」

そう言いながら全力で走るルイ。

「だって、レグナが復活したんですよ」

「だから、あほだって言うんだ。復活したら倒せばいいじゃないか。お前は炎の精霊なんだから。僕だって不死人だ。ハーネだっているんだろ。何とかなるかもしれないだろ」

「こら！ 私だっていますよ。」

横を走る、エリアルがレンにパチツとウインクをした。その肩にはコロもパチツとウインクをしている。どうやらエリアルの右腕は完全に復活したらしい。それどころか、怪我をしていた全ての場所が治っている。流石はクリスだ。

「さあ、ルイ！ とばしますか」

「はい！」

「クリスさん、掴まって！」

手を差し伸べるエリアル。

「おっけー！」

そう言ってエリアルの手を掴んだ。

『広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに』

「！
『いつけ〜！』」

猛烈なスピードで出口を目指す四人。

揺れは、一層激しくなり壁の亀裂は既に割れ目へと変化し、地割れを起こす。

「く、崩れるよ。エリアルさん。もっとスピード上げて！」
「判ってますよ！」

とは言っても既に目一杯のスピードを出しているのだ。

「オバサン！ 急げって言うてんだよ！」
「つんだと、コルア！」

突如殺気を放つエリアル。しかも、『コラ』が巻き舌になっている。

「覚悟、決めるよ。この小娘がああああ！」

まるで、ヤンキーのような言葉使い。

刹那、さっきまでのスピードの三倍はあろうかと言うスピードで突っ切るエリアル。

あっという間にエリアル達は視界から消えていった。

「……あほだ」

「すいません。うちのクリスが」

「外に出たらクリスが死んで無い事を祈るよ」

うなだれる二人。だが、崩れる洞窟はそんな時間をも与える事を

許さなかった。

「ぐが！」

ルイの頭に大人の足のサイズを少し大きくしたぐらいの岩が落ちたのである。

「ルイ先輩！」

「いたたたた。の、脳が揺れる」

少しだけよたよたしながらも出口を目指す。

「大丈夫ですか、ルイ先輩」

「ああ、何とかね。これは疲れるからあまりやりたくはないけど、こんな状況じゃ仕方ないね」

溜め息を吐くルイ。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！」

再び風の魔法を使うルイ。

「な、二重魔法！？ ルイ先輩、使えたんですか？」

「甘い！ 僕が宮廷魔術士に選ばれた理由はこれさ」

精神を極限まで高めるルイ。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を今ここに！」

刹那、信じられないスピードが二人を襲う。

「さ、三重魔法！？ あんた化物ですか」

「化け物いうな。さあ、急ぐよ」

音速を超えそうな勢いでかつ飛ぶルイ達。

「うわわわわ」

焦るレン。だが、その甲斐もあってか、遠くの方で光が見える。
出口だ。

「よし！ 出口だ」

徐々にスピードを落とし、光の中に飛び込む。
眩い光が眼を劈いた。

第十二話 邪神記

「ルイ！ あれを見てください」

洞窟を出て耳にした第一声がそれだった。指を指すエリアル。

「あれ、結界が……」

結界が解けていたのである。そして、崩れた街並み。先ほどの地震で崩れてしまったのだらう。

「街の人達は？」

「うまく逃げ出したみたいだね。まったく言っていないほど気配がない」

恐ろしく静かな街並み。まるで廃墟だ。まあ、これから起こる事を考えれば願ってもないことなのだが。

「さあ、回復してもらいたい人はいるかい？ これから嫌でも戦う事になるんだ」

笑うクリス。その後に、『勝てるとは限らないけどね』と付け加えた。

「レンを回復させてやってくれ」

ただでさえ、レンの背中への傷は深手なのだ。よく洞窟で気を失わなかったのだと思う。

「ルイ君は大丈夫なの？」

「僕は自分でかけられるから」

そう言つて後ろに倒れるルイ。

「ルイ！」

「はは、身体中が痛いや」

駆け寄るエリアルに苦笑するルイ。考えてみれば、この中で一番重症なのはルイなのだ。

氷槍に刺さり、氷漬けされ、拳句の果てには火あぶりにされる。きつと地獄と言うのはこう言う事を言うのだらう。

ゆつくりと光の力を解放していく。
和らいでいく痛み。

「大丈夫ですか？」

心配そうに問い掛けるエリアル。

「はい、ちょっと眠いけど……何とかイケるかな？」

「頼りにしてますよ。不死人君」

パチツとウインクするエリアル。

「はは、人使いの荒いだ事」

苦笑するルイ。

「なんか……いい感じだよね」

とクリス。手は、レンに添えられ、光を放っている。

「ああ。俺達、蚊帳の外って感じだな」

あぐらをかくレンは、足に肘をつき、手のひらに顎を乗せる。眼はジト眼だ。

「つたく！ 世の中、不公平だ！」

唸るレン。

「ほえるなよ、負け犬っぽく見えるよ」

悪戯っぽく笑うクリス。あどけなく笑うその笑顔は、レンの心に深く焼きついた。

「……鈍感な奴」

小さく呟くレン。それぞれが思い思いの時間を過ごす。最後の一時と言う奴だろうか。

そして、最後の瞬間は唐突に訪れた。

「……来る」

何かを感じ取ったのか、呟くレン。

次の瞬間、激しい地震がルイ達を襲う。

「うわっ！」

激しく揺れる地面。割れていく石畳。全てを呑みこむ様な地割れが走る。

『くつくつく、逃げずに待っていたのか？』

何処からとも無く響く声。リクの声だ。

「くっ！ どうやらおいでなさった様だね」

一瞬後、蒼白い光に包まれる大地。まるで、何かを形成していくかのように集中する光。

「あれは！」

その中心に位置する物。それはレグナの眼だった。蒼く無気味に光るレグナの眼。そして、それを覆う光は人型に形成されているようだった。

徐々に具現化されていく身体。土気色の手足。その右手には、しっかりとラルヴァの剣が握られている。

「あの剣、生きてるのか？」

呟くルイ。それもそのはず、今まで見てきた刀身は、そこには無かったのである。まるで大蛇を思わせるような波を打つ巨大な刀身。赤く、血で染め上げられた様な柄。その剣の全てが無気味に見える。あれがラルヴァの剣の真の姿なのだろう。

「相変わらず、でかいな」

姿を露にするレグナ。先ほどの氷狼とまではいかないが、かなりの大きさだ。

「あいつがリクなのか」

ルイがその言葉を口走ったその時だった。

突然吹き付ける強い風。まるで、五感を全て失うような感覚だった。強い眩暈、耳鳴りが四人を襲う。瘴気だ。

「うぐっ」

こみあげる嘔吐感に口を押さえるルイ。それほどまでに強力な瘴気なのだ。

そして、この瘴気に真つ先に中てられたのは、禍人であるルイなのだ。

「ルイ！」

倒れそうになるルイを抱き止めるエリアル。

「何て、瘴気だよ」

頭を抑える呟くルイ。

「相手は、邪神……だからね。悔いは残さない様に行くよ！」

覚悟を決めると言わんばかりに闘神の剣を引き抜くクリス。そして、構える。

「すみませんね。結局、最後の最後まで巻き込んで」

苦笑しながら、右手に炎を纏うレン。

「ルイ。私は、あなたと一緒に居れて最高に幸せだったと思います。嬉しい時も、悲しい時も一緒に居てくれて……本当にありがとう」

赤くなるエリアル。

「私は、貴方を好きになって本当によかった」

まるで最後の決別をするような言葉を残すエリアル。

「何、言ってるんですか。お師匠様」

気合を入れ自分の足で立ち上がるルイ。頭を振り意識を鮮明にさせる。

「皆、永遠の別れを言うみたいに勝手な事言ったださ。少なくとも僕はこんな場所で骨を埋める気は無いね。だから僕は全力でお師匠様を守り、レグナに打ち勝つ！」

覇気に満ちた表情。その表情は、周りの三人に活力を与えた。

「はは、そうだね。私達は絶対にレグナに勝つ！レン。サポートを頼むよ」

「おうよ。任せとけ！」

手を握り締めガッツポーズを作るレン。

「ふふ。じゃあ、守ってください。私も全力で戦いますから」

笑うエリアル。

「了解！」

柄を引き抜くルイ。刀身を出現させる。

三百年と言う長い歴史を経て、最後の戦いが始まろうとしていた。

——スパンッ

腕を振り払うレグナ。そして、蒸発するように霧散していく炎。

「こんなのじゃ通用しないか」

呟くレン。レンの炎は、まるで煙を払うようにかき消されたのである。

当然、ルイ、エアリアルの二人の魔法もこれと同じ様にまったく言っていないほど通じないのだ。

そして、打撃で攻めるクリスだが、相手はもともとりクなのだ。殆どの攻撃を読まれ弾かれてしまう。

「くっ、攻撃手段が見つからない」

毒づくエリアル。焦燥が戦場を支配する。

『くっくっく。この力、この魔力。これが俺の求めていた物だ』

剣を横薙ぎにするレグナ。筋肉は軋み、その巨大さ故に、一つの行動にも、大気は震える。剣を薙ぐ際に生じた風圧を武器に変え、攻撃を仕掛けてきたのである。

「うわっ！」

吹き飛ばされるレン。全体に広がる風は全てを吹き飛ばそうとする。

「広大なる大地を駆ける緑風よ。絶えることの無い神風を刀身に纏え！」

風を纏ったサイコソード。

「いつけ〜！」

まるで斧を振るう様にサイコソードをフルスイングするルイ。先ほどのレグナの攻撃に対抗したのだ。

ぶつかり合う風と風。

いたる所で旋風が起こり、瓦礫を吹き飛ばしていく。

「いたたたた。流石、ルイ先輩」

頭を抑えながら立ち上がるレン。砂埃にまみれたのだろうか、酷く汚れている。

「くそ！ 何か手段は無いのか」

苦し紛れにもう一度振り被るルイ。再び突風が吹き荒れた。

「紅の十二翼を持つ竜王よ。汝、爆炎に姿を変え我と共にあらん事を。我は願う、紅蓮の十二翼！」

放たれる爆炎。爆炎は突風に乗れり相乗効果で竜巻を引き起こす。

「金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！」

竜巻に向けて閃光を放つエリアル。竜巻は閃光をも呑み込み、レグナへと向かっていく。

そして、爆発。計り知れない衝撃が走り、紅い光がレグナを呑み込む。挟まれる地面。吹き荒れる突風。

『くつくつく。所詮、その程度か』

消えて行く炎。おぼろげに映るその姿。

「嘘だろ」

驚愕の声を上げるレン。

『人間の力など底が知れている』

「甘いね！」

いつの間後ろに回りこんだのだろう。クリスだ。

「もらった！」

高く飛び、重力を味方につけ肩から斬り付ける。

剣から伝わる、肉を切り裂く感覚。手応えは充分である。初めて

の有効的な一撃。一つ不満を言えば、その傷の深さだろうか。レグナの大きさから言って、斬り落とすと言う行為は伸縮自在なルイのサイコソードでなければ不可能なのである。

だが、その点はクリスも判りきっていた事であり、斬り落とすつもりも無かった。ただ、大きな傷を作る事。それがクリスの目的だったのである。

「どんな生物でもね、弱点はあるもののさ。仮に、なければ、作ればいい」

『くっ！ 考えたな、ハーネ』

初めてレグナの口から苦悶の声が響く。

「完全無欠のレグナ様、敗れるってね」

笑みを作るクリス。

『だが、弱点を作っただけで勝てると思っているのか？』

瞬間、レグナの両目が怪しく光ったように思えた。そして、その顔は、不気味に笑うように……。

刹那、眩い光がクリスを包み込んだ。そして、爆発。

まるで、時が止まった様に感じた。

三人は状況を理解するのにかなりの時間を要した気がする。

「クリス！」

倒れるクリス。身体中に火傷を負い、意識は既に無いのだろう。

「おい！ クリス！ しっかりしろ！」

駆け寄るレン。抱きかかえるクリスの身体が酷く軽く感じる。

「ルイ先輩！ クリスを」

「分かっている」

手をあてがい光の力を解放していくルイ。

「穏やかな光者よ、悠久の光を癒しに変え、万物の生命を救いたまえ」

軟らかく穏やかな光がルイの手から放たれる。塞がる傷口、だが意識は失ったままだ。

「くそ、クリス！目を覚ませ」

呼びかけるが返事がない。そして、

『そんな悠長な事をしていて良いのか？』

不意にかけられた声。戦闘の最中なのだから当然だろう。

その直後、レグナを中心に光の渦が全てを呑み込んだ。

「限界突破……だなんて」

崩れ落ちるレンとエリアル。身を呈してルイとクリスを守ったのだ。

「……お師匠様、レン」

状況は最悪だった。たった一人残されたルイ。

「何て事を……何て事をしてくれたんだ！」

例えようの無い怒気が込み上げる。怒りで手が震え剣を持つ手がおぼつかない。いや、これは怒気などではない。完全なる殺意だ。満ち溢れる、殺意の波動が魔力を高めていく。

「……覚悟を決める。貴様に後悔をさせてやる」

ゆったりとした動きを見せるルイ。鋭い眼光がレグナを捕らえる。

「お前には、魔法が効かないんだっただな」

刀身の消えたサイコソードをレグナに向け構えるルイ。

「くたばれっ！」

まるで、ルイの言葉に反応するように、無数の刃がレグナに向けて放たれた。刀身を弾丸の様にして飛ばしたのである。しかも、それだけではない。全て、急所を狙い放ったのだ。眉間、鳩尾、心臓、両目。

『ぐっ！』

ラルヴァの剣で無数の刃を薙ぎ払う。弾かれた瞬間、霧散する刀身。

レグナの表情が否応無しに変化していくのが見えた。だがルイは

相手の変化を待つつもりは無かった。

後ろ足で地面を蹴り一気にレグナとの距離を詰める。

『貴様！』

ルイの周りを眩い光が包んでいく。先ほどクリスが重症を受けたあの技だ。そして、爆発。

「こんなので僕が倒せると思っているのか？」

展開される無属性の魔力。絶対障壁だ。

そして再び刀身を発射させた。至近距離から、今度はクリスのつけた傷口に向かって。

『ぐっ……あ』

苦悶の声を上げるレグナ。無数の刃がレグナの体内を貫き斬り裂いていく。吹き出る鮮血。返り血がルイに吹きかかる。

「へえ。……邪神も血が赤いんだ」

血を拭うルイ。その表情は笑っていた。不気味に、そして殺戮を楽しむように。

『調子に乗るな！』

薙ぎ払われるラルヴァ剣。風圧が旋風となり、かまいたちを巻き起こす。

吹き飛ばされるルイの身体。そのまま瓦礫に頭から突っ込んだ。粉塵が舞い上がりそして消える。

そこにルイの姿は無く、今もその瓦礫に埋もれているのだろう。

『くっ、貴様如きにここまで深手を負わされるとは』

直後、光に包まれていくレグナ。軟らかい光が、レグナの傷を癒していく。リクの光の能力も受け継いでいるのである。

徐々に塞がって行く傷口。

『俺を倒したければ、時間を与えない事だ』

高らかな笑い声があたりに響く。そして、クリスがつけた傷口は完全に塞がれた。

——カタッ

瓦礫が動き、ようやくルイが立ち上がる。滴り落ちる血液。左腕が千切れて無いのだ。荒い息、ボロボロになった衣服。だが、ルイは一つも表情を変えていない。左腕を右手で掴み拾い上げる。

「……」

そして、聞き取れないほど小さい声での詠唱。ルイは左腕をレグナに向けて投げた。

「金色の光に包まれし騎士よ。そなたの偉大なる光を刃に変えて敵を撃て！」

放たれる閃光。それも左腕からだ。予想外の行動に直撃を受ける

レグナ。

まるで、意志を持ったように動く左腕。先ほどの詠唱は左腕に魔力を吹き込んでいたのである。

致命的な怪我すらも武器にしてしまっ、凄まじい発想力。

そして、戻ってくる左腕。早急に光の力を解放しその腕を治す。

『くっ！ 何て奴だ。この戦闘で進化しやがって……。だが、俺にもまだ勝機はあるんだよ』

意味ありげに笑うレグナ。

「勝機だ？ お前に待っているのは死のみだ。後は何も残らない。その意識さえもな」

ルイは、静かに言い放った。

第十三話 紅の王者

『貴様には、最後の一手が無いのさ。こんな風にな』

爆発する地面。吹き飛ばされるルイ。

既にどの位戦っているのだろう。見当もつかない。太陽は姿を隠し、変わりに月灯りが照らしている。一応、レンとエリアルも意識を取り戻しているが、戦闘できる状況ではないのだ。

「っ……。がはっ」

鮮血を吐き出すルイ。いくら死なないとは言え既に限界なのだろう。極限まで高めた精神力は疾うに切れ、今は、その代償が付き纏う。眼が霞み、手足がうまく動かないのである。

「ルイ！」

駆け寄るエリアル。そつと、ルイの身体を抱き起こす。

「お師匠様。……逃げてください」

苦痛に顔を歪めるルイ。

「嫌です！ 私は、私は……」

ポロポロと涙をこぼすエリアル。

『大きな事を言っていた割には、情けないな』

レグナはそう言って笑った。

「くそっ！ あいつを消し去る方法があれば……」

「……ありますよ。一つだけ」

静かに呟くレン。手にはサイコソードを持っている。

「なんだって!？」

「俺が、精霊体になる。そして、ルイ先輩と同化すれば……」

精霊体になる事、つまりそれは、レンの自害を意味していた。魂だけになるには肉体を破棄しなければならぬのである。

未だに気を失っているクリスを一瞥してからルイを見た。

「俺は、あいつを倒せるのならここで肉体を無くしても構わない」

決意を固めるレン。

「駄目だよ。そんなの」

首を振るルイ。

「大丈夫つすよ。完全に死ぬわけじゃない。俺が今から自害します。その瞬間にルイ先輩が、回復させてくれれば仮死状態になる」

にっこりと笑うレン。

「完全に……死ぬわけじゃないのか」

「ただ、失敗すれば俺は完全に肉体を失い、ルイ先輩の精神は壊れてしまう。それでもいいですか？」

「成功する可能性は？」

「ルイ先輩次第っすね」

「僕次第って、嫌な返答だな」

考え込むルイ。だがここには守らなくてはならない人がいる。決断は即座に決まった。

「お師匠様」

「ルイ……やるんですか？」

「ええ、もし失敗したら人形としてでもそばに置いて下さい」

はにかむルイ。エリアルルの視界が涙で埋まっていく。

「泣かないで、お師匠様」

そっと、エリアルルを抱き締めるルイ。

「僕は、クリスみたいに世界を救いたいわけでも無いし、私怨もそれほどあるわけじゃない。でも、僕はお師匠様を守りたいんだ。だから少しの可能性でも僕は……やります」

とめどなく溢れる涙。

「……はい」

エリアルルは静かに頷いた。

「覚悟は出来ましたか？」

「ああ」

苦笑するルイ、その笑みは少しだけ謝っているようにも見えた。

「まったく、呑気なもんだぜ。こっちはこれから自害するって言つのにあいつは目を覚まさないし〜」

刀身を出現させ愚痴をこぼす。強気な事を言っではいるが、手は震えていた。

「じゃあな、生きてたらまた逢おうぜ」

クリスを一瞥しレンはその胸にサイコソードを突き刺した。心臓を貫いたサイコソード。

倒れ込むレン。夥しい出血。全ては精霊体になる為に……。

「今だ、穏やかな光者よ、悠久の光を癒しに変え、万物の生命を救いたまえ」

軟らかく穏やかな光がルイの手から放たれる。

刹那、凄まじい魔力の渦がレンとエリアルを包み込んだ。

「これが、レンなのか」

薄っすらと見えるレンの姿。おそらく精神の契約を交わしているからだろう。

「どうやら、成功した見たいっすね。もう後戻りは出来ないっすよ」
「ああ、望むところだ」

精霊体となったレンの身体は、吸い込まれるようにしてルイの身体に侵入した。

その瞬間、脳に膨大な量の情報が流れる。ルーン文字、見たことの無い呪文。そして気が付く。レンの持つ全ての情報が自分の脳にコピーされているのだ。

「――っ！」

自分は声を上げているのか、それさえも分からない。聴覚は全ての音を遮断し、視覚は暗澹に吞まれて行く。

激しい耳鳴りと、眼の奥を抉られるような感覚。まるで、その感覚は精神の契約を彷彿とさせる物があった。そして、それは弱り果てていたルイにとっては地獄のようなものでもあった。

（僕は……無謀だったのかもしれない）

知識の渦に、押し流されるルイの意識。そして、全ての意識を閉じようとしたその時だった。

一つの記憶がそれを押し留めたのだ。自分達との出会いの記憶だ。鮮明に刻まれているレンの記憶。そして、先ほどの映像。

（はは、そうだな。諦めてどうすんだよ）

自嘲地味な笑いを浮かべるルイ。もっとも、この空間では笑っているのかは、定かではないが……。

（僕は……お師匠様を守る！）

刹那、視界が晴れていく。知識の濁流は途切れ、全てが鮮明になっ
て行く。

ゆっくりと開眼していくルイ。そして、全てを悟る。

自分は同化に成功したのだと。湧き上がる魔力。以前とは比べ物にならない。二人分の魔力を制しているのだ。

「ルイ……なの？」

耳に入る声、エリアルだ。驚嘆の声を上げている。

「ええ、そうです」

笑うルイ。

月明かりに曝されるルイ。

髪の毛は、今にも燃えるような真紅に染め上げられている。碧眼だった左眼は右目同様赤眼だった。

そして、何より額の黒い六芒星の痣が紅く変化している。精霊を取り込んだ証とでも言いたいのだろうか。

（へへっ、どうっすか。ルイ先輩）

内側から響くレンの声。

「いいね、この力。最高だよ」

無限に湧き上がる力。

「これなら、あいつに勝てる！」

サイコソードを拾い上げるルイ。

「さあ、反撃開始だ！」

掛け声と共に現れる刀身。氷狼を倒す為に作り上げたあの刀身だ。

『レンを取り込んだのか。人間風情にここまで出来るとは』

『リク。……いや、レグナ。僕はお前を倒す！』

『面白い、やれる物ならやってみろ！』

薙ぎ払われるラルヴァの剣。渾身の一撃がルイを襲う。

「確かにレグナになったお前は腕力もある。魔力だって強い」

炎を纏い放つ。炎はすぐさま爆炎となりレグナを呑み込んだ。まるで、限界突破のような威力。いや、それ以上かもしれない。

『ぐっ……あ』

耐え切れないのか苦悶する声が響く。

「けどな、喧嘩は相手をよく見てから売るものだ」

地面を強く蹴り高く跳ぶルイ。剣を斜に構え、そのままレグナの肩を斬り裂いていく。

圧倒的な戦力の違い。全ての事を理解し、精霊の力を完全に己の物としたルイ。

『ぐあああっ！』

躊躇は何一つ無かった。数時間前、クリスが斬り付けた所に振り下ろす。正確に、そして、今度は致命傷になるほどに深く。

レグナの眼が大きく開かれルイを捕らえた。一呼吸置いて盛大な血飛沫が地面を真紅に染める。

『貴様！』

「弱いんだよ、邪神なんか頼って力に溺れてる奴に負けるかっての！　だつてさ。レンからの伝言」

につこりと笑うルイ。

「それと、これは僕からの報復！」

両手をレグナに向けるルイ。

「消えてなくなれ！」

すべての魔力を集中させゆつくりとカオスワードを呟く。すべては未来のために。すべての未来のために。

「紅の十二翼を持つ竜王よ。汝、爆炎に姿を変え我と共にあらん事を。我は願う、紅蓮の十二翼！」

紅い光がレグナに向けて放たれる。全てを消し去る希望の光。

「バイバイ！」

一瞬後、凄まじい衝撃がゲートの街を包んだ。

第十四話 エピローグ

レグナが消滅してから二週間がたった。

ゲートの街にも活気が戻り、あの地獄の一日は、超常現象と言うことで片付けられてしまった。

実際そっちの方がありがたい事だったのだが少しだけ、寂しい気がした。

あの後、すぐにクリスは意識を取り戻したが、レンが死んでしまったのと勘違いをしてショックを受けそのまま倒れこんでしまった。その後、説得するのに四日かった。

これには流石のレンも頭が上がらなかつたらしく、三日間は土下座しっぱなしだった。

そして、更にビックリした事に、クリスとレンは、宮廷魔術士の座を降りると言い出したのだった。本人いわく目的も達成したのでこれ以上厄介事に巻き込まれるのは嫌だとの事。

まあ、当然といえば当然である。

そして、レグナを倒した張本人はと言うと、紅く染まった額の痣を見て怨嗟の声をあげていた。どうやら同化した時に、エリアルは魔力がレンの魔力に干渉してその現象が起きたらしい。それは、レンが身体から出て行ったあとにも継続されていた。エリアルは『気分転換にちょうどいいじゃないですか』と言って笑っていたが、そこはエリアルとの想いでが詰まった場所でもある為、何としても元に戻したいルイであった。

「重い」。ねえ、ちょっと待ってよ」

後方からクリスの声が響く。すっかり体調を整えたクリス。

「だゝめ。早く待ち合わせ場所に行かないとお師匠様が心配するよ」
「そうだよ。それにクリスは物を買いきなんだよ」

呟くレン。

両手に食料の入った紙袋。そして肩に水の入った樽。旅をするには、一週間は大丈夫ぐらいの装備を大量に買い込んだ。

「ひつどーい。あなた達、本当に人間？ ちょっとそれは無いんじゃないの？」

クリスがジト目でレンとルイを見る。

「あ、ごめん。僕、アンデットだし」

「悪い。俺、精霊」

数秒の間。

そして……。

「あうううう。痛いよ。何もぶつ事無いじゃないか」

頭を抑えながらつぶやくルイ。

「ルイ先輩なんてまだ良いっすよ。俺なんか水ぶっ掛けられたんですよ。しかも、樽丸ごとで！」

「黙りなさい！ あんた達が屁理屈ばかり言ってるからでしょ」

とクリス。そして、それを見て笑うエリアル。

「さあ、行きますよ」
「キユイ」

エリアルルの肩で鳴くコロ。あの戦いが終わった後にひょっこりと戻ってきたのだ。

流石はペットと言っかなんと言っか……。

「でもさ、いいの？ 私達が同行しても」

問い掛けるクリス。

「何を言ってるんですか。連れて行けと散々駄々をこねた癖して」

呆れるエリアルル。

「だって、居心地良いんだもん。それにおばさんからかうと面白いし」

「あんだと、コラ！」

「また始まったよ」

頭を抱えるルイ。だが、この空間、確かに居心地はいいかもしれない。

ルイは、そう思いながら喧嘩の仲裁に入った。

第十四話 エピローグ（後書き）

と言っわけで終わりました。

いま読み返してみると本当に酷いなつてのが感想です。

最初は手直ししてみようと思ったのですが、全文章に問題があつて直すとなると一から全部書き直しになつてしまうので、直す気にもなれずそのままアップしてみました。

今もバトル描写を書くのは好きですけど、本気で何書いているのかわかりませんね、この頃は（今もたいして変わっていませんが）

これが七年前の私の実力だったんだなつて改めて実感します。

さて、最後にこんな駄文に付き合つてくださった皆様、本当にありがとうございました。

気が向いたら『虚無の王』もお付き合いしていただけると幸いです。七年前の私と今の私を見比べると……進化つてしてるのかななんて思っていますかね。さて、今度こそ本当に最後です。それでは、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2072k/>

Red Eyes

2010年10月10日16時06分発行